

花 葉

2005
No.24



花 葉 会 発 行

イワタニ農業資材&省力機器



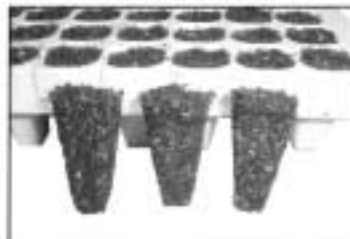
カナダ産ビートモス
(ヨーロッパ産ビートモスもあり)



ミキサーと小型ポットイングの組み合わせ

播種用土
・MIXビート、BM-2
・システムソイル

エクセルソイル



播種機から用土詰機まで

■発売元

イワタニアグリグリーン(株)

本社 〒111-0051 東京都台東区蔵前3-12-6

TEL: 03-5687-0751 FAX: 03-3862-5147

大阪支店・名古屋営業所・福岡営業所

■製造元

京和グリーン(株)

〒640-8391 和歌山県和歌山市加納277-4

TEL: 073-474-5117 FAX: 073-472-8526

松島工場・平尾工場

SCARLETT

見つめていたい
洗練されたまばゆい輝き
「スカーレット」

明るく透明感のあるカラー

真紅の輝きが持続する

新しいポットカーネーション

母の日に大切な人へ

あたたかな想いと一緒にお贈りください



花のある暮らしをお手伝い

こころ開花
KIRIN

キリンビール株式会社 アグリバイオカンパニー

〒104-8288 東京都中央区新川2-10-1 TEL.03-5541-5875 FAX.03-5541-5879

キリンビール株式会社 植物開発研究所

〒329-1414 栃木県さくら市早乙女字申塚3377 TEL.028-686-4511 FAX.028-686-5060

www.kirin.co.jp/scarlett

(スカーレットはキリンビール(株)植物開発研究所から生まれた新しいポットカーネーションです)



「生きている」ということ

村 井 千 里

花卉を利用する人々の多くに、「生きている」という感動を大切にしたり、植物の生活の不思議を発見する楽しみを知りたいという意識をもつ人が少ないようだ。20mを超える樺の枝先にまで水が揚がるのは何故と考えた人は何人いるだろうか。ある園芸に関心のある人々の研修会で質問すると、「木だから当然」という答えが大多数であった。

植物が生き残るために工夫していることへの諸現象を広く知らせてこそ、園芸に興味を深める人々が増加するのではないだろうか？ 園芸植物の生理・形態・生態などの情報の提供も不十分な今日、園芸植物への科学の目を育てることも大切であって、それに伴う基礎データの整備を行う必要を忘れてはならない。

昨今、小中学生の理科離れが問われているが、知識としての学習が多くなり、驚きの学科であった理科ではなくなってきている。中学校の教科書は、色刷りの絵本となり情報として正確で知識としては申し分がないのだが、実験を通しての未知のものに接した感動が湧いてこないほどに、懇切丁寧に出来上がり、結果が与えられてしまっている。

「こういうもの」という知識は豊富になり、問題はインターネットで調べ、それで終わる習慣になってきた現代人

のガーデニングやフラワーアレンジなども、植物の環境変化に対応して、その時その時を生きているという過程の中で「生きざま」に感動してきた日本人の心のあり様を置き去りにしているように思われてならない。

安達瞳子さんは、花を生ける心は「那の一点」を大切にすることと言われている。瞬きをするような短い時の空間、人も植物もその積み重ねで生き、その中には生命の燃え上がる瞬間がある。そのような重大な時を凝視すると、生きるということの真実を取り戻す。野山で一輪の花に足を止めたり、庭で育てたり、花を室内に挿したりを続けてきたのではと、記している。そして、花を生けるという行為は、生きているものを切ることで、人と花とが一体となって、新しい作品としてその生命を生きるという。

その作品の生命を左右する環境をよりよくする確かな情報を提供しなければならない。フラワーデザイナーを目指す学生に照度計の使い方を問うと、げげんな顔をする人が多い。光補償点を知らないからだ。水揚げの技術はあるが、光が不足すると水揚げが悪くなるし、消耗が多く、那の一点の輝きができないという知恵になっていないからだろう。

花 葉

2005
NO.24

目 次

禁無断転載

私の提案 「生きている」ということ	村井 千里 (1)
最新科学情報 DNA、遺伝子、そして花産業	安藤 敏夫 (2)
表紙解説 青いケシの産地雲南にて	田中 桃三 (5)
文化の伝承 江戸時代からの斑入り植物	横井 政人 (6)
日の丸ブリーダーの一人として	竹下 大学 (10)
サントリーグループの花事業への取り組み	村上 保之 (14)
園芸古書の解説Ⅲ ～岩佐蔵書より～	岩佐 吉純 (18)
自叙伝抜粋 園芸一筋の幸せ人生	鈴木 司 (22)
私のビオラ育種	秋山 泰男 (24)
花卉卸売業の後継者として	石田 裕一 (31)
岐阜県における「花の都ぎふ」運動とバラ	上田 善弘 (34)
「園芸」をテーマとした絵本を探す	山田 幸子 (38)
海外園芸事情調査団報告 広州・香格里拉・老君山・麗江を訪ねて	山口 まり (42)
井手みえこさんを偲んで	植村 猶行 (49)
「2005花葉サマーセミナー」レポート 動き出した生産者育種	久保田芳久 (50)
花葉会総会 (54)	花葉会会則・役員名簿 (56)
花葉会賞受賞者紹介 (57)	記念講演・アメリカの植物園に勤めて (61)
会員名簿の追加と訂正 (62)	

DNA、遺伝子、そして花産業

千葉大学園芸学部

安 藤 敏 夫

花卉園芸学研究室のいま

上田善弘助教授が3月に岐阜県立国際園芸アカデミーに転職したため、10月1日現在、花卉園芸学研究室のスタッフは私（教授）と、國分尚助教授（9月に昇任）の二人だけである。教員削減の影響を受けて、助手ポストは順番待ち。他の研究室の助手が空くまで採用できない。もっとも、園芸別科の花卉専攻を担当する渡辺均助手もおり、定員が補充されれば園芸学部の花卉研究者は4人体制である。

近年の花卉研は「フィールドからDNAまで」をスローガンとして活動してきた。目指すものは「園芸植物遺伝資源学」の創生。もっとも花卉しか扱わない花卉研の場合の目標は「花卉遺伝資源学」ということになる。まず、①花卉の野生遺伝資源を求めて自生地（フィールド）を探索する。②次に、採集してきた植物を大規模に栽培して、遺伝資源としての性能を様々な角度から評価して、育種の基礎情報を提供する。③そしてDNA配列の違いなどから、野生種の類縁関係を明確にして、交雑育種の用途を予測したり、有用形質が発見されたなら、その遺伝子をクローニングしたりする。

もともと栽培系だから②は得意である。平成3年に農場が柏市に移転してから、旧農場跡地は研究農場となり、敷地は研究室毎に配分されている。花卉研では3棟の温室（各65坪）と11棟（34～54坪）の硬質プラスチックハウスを使って、常時1万株の遺伝資源を栽培しているが、こんなことができるのも農場が移転したお陰である。もちろん全国の花卉関係の研究室の中では最大規模である。

①に関しては、1988年から著者が学生とともに、南米大陸をフィールドとして、ペチュニア属の野生種を集めている。今年で18年目を迎える。探索範囲はウルグアイ（全域）、ブラジル（南端の3州が中心）、パラグアイ（南東部）、アルゼンチン（北半分）で、現在、アルゼンチン探索の最終段階を迎えている。最後に残ったのはボリビアである。南米での走行距離は15万キロを越えてしまった。上田助教授は、1996年から、バラ属の遺伝資源を追って、中国（新疆ウイグル自治区、四川省、雲南省）、ラオスを探索していた。ともかく、

花卉研の①は世界のトップレベルと言えるまでになった。事実、英国の植物学専門誌＝Annals of Botanyの最新号に発表した花卉研の論文は、その表紙を飾る栄光に浴している。

問題は③である。花卉研には5年ほど前にDNAシーケンサーという、4千万円もする機械が導入されて、DNA・遺伝子解析の準備が整った。しかし、なかなか技術は向上しなかった。その原因は、勉強嫌いの上に、アルチューハイマーの気がある教授の頭だった。なかなかDNA技術を理解しない。それでも、執念深い性格が功を奏してか、だんだん分かってきたらしく、感でDNA技術をつかんでしまった。教授はもう③の分野でも学生を指導している。

これは分子生物学の世界であって、世界には猛烈な強者がいてどうも分が悪いが、なんとか一流紙に投稿できるようになった。ただ、月額100万円を下回らない試薬代には頭を悩ませている。国から支給される研究費は年間50万円前後に落ち込んでいる。全て稼いでこなければならぬ時代、金の切れ目が縁の切れ目、と言われるDNAの世界の厳しさが身にしみる昨今である。

前置きが長くなったが、このようにして、一介の花卉園芸学者が見たDNAと遺伝子の世界をご紹介します。

DNAと遺伝子

DNAはヌクレオチドとよばれる塩基が、2重の螺旋構造を形作りながら非常に長いひも状に結合した物質である。その塩基にはたった4種類しかなく、A（アデニン）、T（チミン）、G（グアニン）、C（シトシン）の4文字で表記される。必ずAはTと、GはCと結合するので、螺旋構造を形作る2本鎖の一方の配列を決定すれば、自動的に他方も決定できる。このようにDNAはA T G Cの4文字で表記される4進法の暗号であり、コンピュータが0 1の2文字で表記される2進法の暗号であることとよい対比をなしている。

たった4塩基とはいいいながら、例えば5塩基配列のもつ情報量は4の5乗＝1024にもなる。ヒトのDNAは30億塩基と言われているから、4の30億乗となり、その情報量は想像を絶する値である。驚くことにマウスは33億塩基もあってヒトより多いし、バッタは50億塩

基、ユリ科には1200億塩基もある極めて長いDNAをもつ種もある。だから、DNAには無駄な、つまり意味のない配列もたくさん含まれていることが分かる。逆に、DNA配列の中に存在する意味のある配列が遺伝子ということになる。

DNAは3つの塩基で一つのアミノ酸を合成するルールになっている。例えばTTAはロイシン、GCTはアラニン、GATはアスパラギンを合成する。理論的には、3塩基によって4の3乗=64通りのアミノ酸を合成できる訳だが、実際には最初の2塩基によってアミノ酸を定義している場合も多く、例えば、GCT、GCC、GCA、GCGはどれもアラニンを合成する。これらの3塩基をコドンと呼んでいる。このようにDNA暗号は3塩基を単位としたコドンの暗号に他ならない。

ここで特別な意味のあるコドンに注目しなければならない。ATGはメチオニンを合成する唯一のコドンである。遺伝子の先頭は必ずATGで始まることから、これを開始コドンと呼んでいる。一方、TAA、TAG、TGAの3つのコドンはアミノ酸を合成しない。つまり、このいずれかが遺伝子の末尾になることから、終止コドンと呼ばれている。このように、遺伝子はDNAの中の開始コドンと終止コドンに挟まれた部分であり、DNAの中に遺伝子は飛び飛びに配置されている。

こうして遺伝子によって合成される一連のアミノ酸がペプチド結合してタンパク質が合成される。従って、一つの遺伝子の産物は、その遺伝子によって定義される一定の構造をもったタンパク質ということになる。

モデル植物

この様に非常に情報量の多いDNAであるから、その全ての遺伝子の働きを調べ上げることは簡単ではない。どこに遺伝子が存在するかという問に答える前に、全DNA配列をとりあえず読んでしまおう、というやや乱暴な（失礼！）力仕事はゲノムプロジェクトと呼ばれていて、国毎に担当する染色体を分け合って、国威をかけて諸国がDNA配列の決定を競い合っている。植物では、シロイヌナズナとイネの全DNAの配列を読み終えている。一方で、そのDNAのどこにどのような遺伝子が存在するかを調べる研究も平行して行われている。

このように、遺伝子を徹底的に調べてしまおうと、世界の研究者が注目する植物をモデル植物と呼んでいる。花卉の中のもっとも有名なモデル植物は、ペチュニアとキンギョソウである。どちらもアントシアニン合成系の遺伝子は、ほぼすべて解読を終えている。

品種改良は遺伝子変異の歴史

花卉研では、モデル植物の一つであるペチュニアを用いて、品種改良の歴史を遺伝子変異の歴史として記録するための研究を始めている。その手始めとして、ペチュニアの花色育種の歴史を、アントシアニン合成

系遺伝子の変異の歴史として記載する、園芸界として初めての研究に挑戦している。品種レベルでペチュニアのアントシアニン合成系遺伝子を調べているのは今のところ花卉研だけであるが、いつ競争相手が登場するか、戦々恐々とした日々でもある。だが、こうして少し見えてきた花色育種の歴史は、意外な表情をもった遺伝子の歴史であった。

1990年代に日本から発信されたサフィニアを代表とするカスケード型ペチュニアは、新たな野生種の遺伝子が追加されたことから、非常に大きな形質の変化を生んだ。まさにペチュニアの革命であった。しかし、それ以前のペチュニアは、1830年代に英国で2種の野生種（アキシラリスとインテグリフォリア）を両親として作出された雑種の後代と考えられており、カスケード型ペチュニアとは一線を画したまとまりのある形状をもっている。これは遺伝子の変異幅が狭いことの証拠と考えられる。これをスタンダード型とすることにしよう。スタンダード型には、かつて第3、第4の野生種も交配されているという意見もあるが、いまのところその証拠は遺伝子に発見できない。

アントシアニンの単純化

ペチュニア野生種の花に蓄積している主要なアントシアニンは複雑な構造のマルビジン誘導体である。比較的簡単な構造のアントシアニンを蓄積する野生種もあるが、どれも1960年代以降に発見された新種であり、1990年代以前のスタンダード型ペチュニアの育種には使われていないようだ。

スタンダード型ペチュニアの両親の花色は白（アキシラリス）と赤紫（インテグリフォリア）である。野生種に比べれば、品種は非常に花色が豊富で、複雑なアントシアニンをもっている様に思われる。しかし、実際には、品種のアントシアニンの構造は野生種のそれに比べれば単純なものばかりである。特に、120年もの品種改良を経て1950年代になってやっと作出された赤を発色するアントシアニン（シアニン3グルコシド）は、もっとも単純な構造である。つまり、品種改良が進むほど、花のアントシアニンは単純構造になっていく、という意外な事実が見えてくる。

野生種の花に存在する複雑なアントシアニンを合成する一連の遺伝子群のどれかが、何らかの原因で働かなくなると、アントシアニン合成系が中断してしまい、野生種には存在しないアントシアニンが蓄積することになる。それは野生種には存在しない色彩であって、園芸的には新花色として尊ばれる色彩となる。

花色に関する育種家の仕事を、野生種にない色彩を作出することとするならば、腕のいい育種家は、このように壊れた遺伝子を発見して、それを上手に使いこなす技術に長けた技術者と表現可能であろう。どうやらこれはペチュニアだけの話ではないらしい。次第に

分かってきたことは、どの花卉においても野生種のアントシアニンに比べて、品種のアントシアニンの方が構造的に単純であり、育種家は同じように壊れた遺伝子を上手に使ってきたらしいのである。専門的には壊れた遺伝子のことを、変異遺伝子と呼んでいるが、同じ意味である。

遺伝子を破壊する遺伝子

ヒトのDNAも例外ではないが、DNAの中には、自分の力で動き回り、DNAの他の領域に潜り込むことができる奇妙な遺伝子が含まれている。これをトランスポゾンと呼んでいる。普通の状態だとトランスポゾンは静かにしているが、DNAにストレスがかかると、急に動き出す。トランスポゾンが動いて、遺伝子の途中に潜り込んでしまうと、その遺伝子の塩基配列は変わってしまう。つまり遺伝子に変異してしまう。こうしてトランスポゾンは遺伝子変異の主要な原因と考えられているのである。

遺伝子にトランスポゾンが刺さると、遺伝子の先頭から3塩基（コドン）単位で読んできた暗号にずれが生じてしまう。これをフレームシフトという。ずれた塩基暗号の中に偶然ストップコドンがあれば、遺伝子の翻訳はそこで止まってしまう、機能をもったタンパク質が作れないこともある。これは遺伝子の破壊である。新しい位置のストップコドンによって作られた、別のタンパク質が生存競争に有利なものであれば、遺伝子の破壊と言うより、遺伝子の進化と言った方が妥当となる。このように遺伝子を破壊する遺伝子は進化の原動力でもある。

アントシアニン合成系遺伝子の場合には、こうした遺伝子の破壊によって新花色を作る変異遺伝子が誕生する。事実、市販されているペチュニアのアントシアニンの質（どのアントシアニンを蓄積するかという意味）は、たった3つの遺伝子の変異によって全て説明できる。最初の遺伝子（3Rt）には花卉研がdTph3Cと名付けたトランスポゾン（Cは千葉大学のC）が刺さっており、フレームシフトの結果、その遺伝子にストップコドンが生じて翻訳が止まっていた。

第2の遺伝子（Hf1）には、2種類の変異が見つかった。つまり、この遺伝子には2回、別々の変異が起こっていた。それらを発見した育種家が二人いたのかもしれない。

その一つは花卉研がdTph9と名付けたトランスポゾンが刺さっていた。もう一つの変異を起こしたトランスポゾンをrTph1と名付けたが、これはペチュニアで発見された最初のレトロトランスポゾンとなった。どちらの変異にもストップコドンが生じており、それらが遺伝子破壊の原因となっていた。

第3の遺伝子（Hf2）の破壊の原因はトランスポゾンではなかった。遺伝子の途中に挿入されている意味

のない塩基配列（イントロン）の一部が欠損していることと、遺伝子本体（エクソン）の塩基が数カ所別の塩基に置換されていることが、変異の原因と思われるが、ストップコドンが生じているわけではないので、この変異の原因追及を進めているところである。

第1と第2の遺伝子に生じた変異は、おそらく栽培中に生じた変異であろうが、第3の変異は、もともと品種の歴史的な母親がもっていたものにそっくりである。

ペチュニアの花色に関しては、新花色の登場というトピックスとして記事が残されているから、かなり歴史をさかのぼることができる。歴史的資料と、こうした遺伝子の変異を重ね合わせると、最初に変異したのが、第2の遺伝子であって、第3の遺伝子の変異と重なって、ピンク（アントシアニンはペオニジン）を生じたい。次いで第1の遺伝子に変異が起こりサーモン（シアニジン）が誕生した。引き続いて、アントシアニン濃度を高める何らかの遺伝子変異が起こって、1950年に赤が誕生した、というペチュニア育種の歴史の一端が垣間見え始めた。

更なる挑戦

アントシアニン濃度を高めたのは第4の遺伝子（FLS）とする説が有望だったが、実際の市販品種のこの遺伝子には変異が見つからないため、濃色化の原因は分かっていない。

ペチュニアで白花を作り上げるには二つの方法が考えられる。一つは、アントシアニン合成系の初めの部分、つまりまだアントシアニンになっていない無色の原料の段階を司る遺伝子で、これが破壊されれば、簡単に白花が誕生する。アントシアニンを合成するために必要な各々のステップに働く遺伝子を総称して構造遺伝子とよぶが、その他にもアントシアニン合成系の全体を動かすために必要な、いわば電源のような遺伝子も知られている。これらを総称して制御遺伝子と呼ぶが、この制御遺伝子が破壊されてもアントシアニンは合成されず、白花になってしまう。従来の定説は、ペチュニアの白花を一つの制御遺伝子（An1）の変異としているが、実際の市販白花品種のこの制御遺伝子に変異は見つからなかった。白花の原因追求も急がねばならない。

おわりに

もうじき24時を回る。著者は明日、南米に行く。この17年間、11月を南米で過ごし、四季は春夏春冬を繰り返し、秋がなかった。一昨年、家族の事情で日本に留まったが、日本の秋の美しさが心にしみた。あと4回の11月が終われば、日本の秋をたっぷり楽しみたいと思う。もう著者の研究生活も秋だから。

青いケシの産地雲南にて メコノプシス・ベトニキホリア (*Meconopsis betonicifolia*)

田 中 桃 三

今年度の花葉会の海外研修旅行は、中国の広州、雲南地方であったが、シャングリラ（中甸）、老君山の自生地探訪では、数多くの貴重な植物や多くの園芸植物の原種を見ることができた。詳細については42ページを参照していただきたい。

この地方は日本の沖縄とほぼ同緯度で、高度3000～4000mの地帯であるが、雨量も多く植物の種類も多い。特に老君山の山頂付近はシャクナゲの森林が見事であった。今年は昨年との天候の影響からか、開花している株は少なかったが、下草にサクラソウ属やエンゴサク属などが群落をつくっていた。

そしてそんな中に、このメコノプシスがあった。場所は山頂より下ったやや開けた斜面。数株ずつ、散在していた。やや離れたところには、赤い種類と黄色い種類があった。赤色種はベトニキホリアで、黄色種は別種と思われる。

ヨーロッパでは以前から栽培されていたが、夏の高温に大変弱く、日本での栽培を難しくしていた。しかし近年では春先に、店頭で鉢植えなどで見られるようになった。青いケシは日本ではようやく園芸植物の仲

間に入ったのではないだろうか。

メコノプシス属には約45種類ほどふくまれるが、ヨーロッパにある1種類を除き、ほとんどはヒマラヤから中国に分布する。このうち雲南には17種類があるが、もっとも大きな花をつけるグランデス (*M. grandis*) はネパール産で雲南にはないが、花の色が鮮やかなホリドウラ (*M. horridula*) は自生する。いずれも剛毛におおわれる。

しかし写真のベトニキホリアは比較的毛も少なく、草姿はやさしい。また生育環境も湿潤な森林の中などを好み、生長も早い。現在鉢植えとして流通しているのも本種やこれらを交配した種類が多い。透明感のある花色は観賞植物として有望と思われるので、今後耐暑性のある品種が育成されることであろう。

ヨーロッパ産のカンプリカ (*M. cambrica*) は黄色花で八重咲も作出されている。

今回の旅行ではメコノプシス属は他に3種類ほど見ることが出来た。いずれも3200m以上の日当たりのよい礫まじりの斜面にあり、高さも50～60cmから1mを超えるものまで生えていた。



メコノプシス・ベトニキホリア

江戸時代からの斑入り植物

横 井 政 人

「花葉」23号9ページ(2004年)で、浜名湖花博 園芸文化館に私が出品した斑入り植物について概略を記した。ここに陳列した62種類の斑入り植物は、江戸時代発刊の「草木奇品家雅見」や「草木錦葉集」に記載された種類で、原図と比較して同じものと考えられる種類を選んだ。

本号では花博で展示した斑入り植物を中心に、若干の原図をあげ、原著の解説および現状を記すことにする。

利用した書籍を以下に挙げる。

原著：

1. 「草木奇品家雅見」(文政10年)(1827)

青山種樹家 金太、染井花屋 源二著

天〔上〕地〔中〕人〔下〕の3巻から成る。

2. 「草木錦葉集」(文政12年)(1829)

水野忠暁著

前編：巻1 い〜へ (いろは順)

巻2 と〜わ

巻3 か〜よ

後編：巻4 た、れ、そ

巻5 つ、ね

巻6 な、ら、む (ここで終了)

参考書：

1. 「草木奇品家雅見」解説 監修 岩佐亮二

前島康彦、笠原基知治、横井政人、広瀬嘉道

(青青堂出版 昭和51年)

2. 「草木錦葉集」解説 監修 塚本洋太郎

芦田潔、岩佐亮二、岡村はた、広瀬嘉道、前島康彦、横井政人

(青青堂出版 昭和52年)

解説記載法：

奇＝「草木奇品家雅見」上、中、下巻

奇上(巻)－(原本)10(ページ)

{解説本} 15(ページ)

錦＝「草木錦葉集」1～5巻、付録

錦1(巻)－(原本)24(ページ)

{解説本} 15(ページ)

**1. アオキ 荒木亀甲あを木
奇下-12 (307)**

このアオキ品種は現在人気のある「駿河弁天」、または「三河弁天」という品種と葉形、斑入りがそっくりで、江戸時代にはカメのこうらの形から亀甲あお木と名づけたと思う。栽培者は四谷荒木横町 弥次兵衛とある。



アオキ 荒木亀甲あを木

**2. アオキ 天か下あを木
奇下付録-11 (408)**

覆輪アオキで現在あるものに似ている。斑入りの安定性が強く人気がある。



アオキ 天か下あを木

**3. アカメガシワ
さばきり 奇上-25 (89)**

解説がないが葉形、斑型が現存タイプに似ている。実生から同じタイプの斑が発現するので保存は容易で、販売されている。

4. アスナロ 黄斑あすなるふ 奇下-13 (316)

同じタイプの白色斑入りが、現在ときに販売されている。ただここでは「色よき黄斑なり」と説明されている。



アヤメ かまくらあやめ

**5. アヤメ かまくらあやめ
奇下-16 (329)**

本所 善右エ門の名がある。現存品種と同じ。

**6. アリドシ 松本丸ふくりんありどし
奇中-5 (127)**

当時アリドオシの変化が多く見られたようである。本図の品種は現存のものほとんど同じと思う。現在は散り斑の品種も売られている。

7. イスノキ 上ふくりんひょん 奇中-20 (181)

現存の覆輪品種と同じに見える。本種は今でも一名ヒョンといっている。常緑低木。



イチョウ 白布いちょう

8. イチョウ 白布いちょう 錦1-6 (30)

中国原産の落葉高木であるが、既に江戸時代には斑入りまでが普及していたようである。

9. イチョウ 金王いちょう 錦1-6 (32)

稀に現在販売されているイチョウの縞斑で正確な図には驚く。葉型も変形する変わった品種。

10. イヌツゲ 水の白ふくりん 錦5-17 (768)

イヌツゲの斑入り品種は現在でも多いが、既に江戸時代にもいろいろ見つけられていた。10品種以上が記載されている。

11. イブキ 水のかまくら青布 錦1-6 (20)

現存するイブキ斑入りと同じと思う。「文政四年、大久保村金助より入る」とある。筆者の生まれた土地なのでなんとなく親しみがでる。

12. イヌマキ おきすなごふくりんまき 奇中-21 (187)

よく似る散り斑品種がありオキナマキと呼ばれている。ラカンマキの斑入りかもしれない。現存品種に似る高室きふなんばんまきがある(奇上-11 (28))。

13. イボタ いぼた白布、黄布 錦1-8 (44, 45)

図柄は現存イボタとそっくりで、花も描かれている。斑の変化の激しさもわかる。

14. ウチワサボテン 高橋さぼてん 奇中-16 (166)

現存名が「初日の出」と呼ばれる品種がぴったりで、既に江戸時代にサボテンが渡来していることがわかる。図は前号参照。

15. ウバメガシ 岩目砂子 錦1-5 (5)

岩目が現在ウバメとよばれている。解説に白砂子斑とあり現存斑入りと同じに見える。普及品。

16. ウメ おきな梅 錦6-38 (1001)

現在でもオキナウメ(翁梅)とよび斑入り品種の代表である。正確な図で驚く。またキンショウバイ(錦生梅)という枝に黄斑が入る品種も現存する(錦6-38 (1007))。



ウメ おきな梅

17. オカメザサ 孫次豊後竹 錦4-4 (567)

現在はシマオカメザサとよびまったく同じ図柄が描かれている。珍しいが現存する。巢鴨産とある。

18. カクレミノ 石川かくれみの 奇上-20 (65)

本図も現存品種とまったく同じ柄で、この斑柄品種の大木が茨城県で見つかった。普及品種。



カクレミノ 石川かくれみの

19. キク 玉川の月 奇中-16 (161)

記載に「瀬田村行善寺近辺は菊花を愛る」とあり、「白斑が見事也」と書かれている(略記)。キクの同じ斑型は現存。



キツタ 二色つた

20. キツタ 二色つた 錦5-21 (807)

冬に白斑部分が紅色がかかるというので、この名がつけられたのであろう。

21. キャラボク きふ須藤男きやらぼく 奇中-42 (259)

現存の斑入り品種とよく似ている。

22. クチナシ ふくりんくちなし 奇下-9 (301)

よく似ている斑型品種が今でも見られる。

23. クワ 木原べっこふくわ 奇中-24 (197)

本図とそっくりな斑入り品種が現在販売されている。

24. コウヤマキ なるせかうやまき 奇中-4 (119)

成世候は麴町の名園で、奇品が好きな人となる。現在

貴重な斑入り品種として少ないが販売され、各地に大切に植えられている。図は前号参照。

25. サカキ ながしまさかき

奇上-3 (4)

当時から多くの斑入り品種があったようである。現在でもいろいろな型の斑入り品種が栽培されている。本図は覆輪、中斑品種は奇上-23 (76) にある。



サカキ ながしまさかき

26. サングジュ 浅井さんごじゅ 奇上-18 (60)

現存品種と同じ斑入りがある。浅井は四谷新邸に住む愛好家のようなものである。

27. シノキ ふくりん小葉しい 奇上-9 (25)

シノキ覆輪品種は現在普及しているが本図の覆輪と同じかどうか疑問である。

28. シマカシ 永縞しまかし 錦3-9 (422)

永縞宅の木から「枝替り」したとある。すばらしい図で現存品種とぴったりである。

29. シラン 紫らん 錦6-33 (968)

最近の本図のような縞斑品種も販売される。

30. ジンチョウゲ 青ふくりん 錦2-12 (254)

ここに17品種ほどの斑入り品種が記載され、なかに現存品種もある。本図のものは最近繁殖されるようになった。特によい深覆輪品種は大ふくりんと呼び奇上-2 (2) にある。

31. ソテツ 雲峰ふ入りそてつ 奇中-43 (268)

雲峰大岡翁は四谷の人。最近は似た斑入り品種がまれに見られる。

32. チャノキ はた長茶の木 奇中-41 (257)

「草木錦葉集」2巻-7に他の多くの斑入り品種が描かれている。現在斑入り品種は少ない。

33. ツバキ 錦5-6~16、奇付録-7など

斑入り品種は両古書に多く描かれ、現在より多い。

34. ツワブキ 錦5-22 (813、815など)

現存。



ツワブキ

35. テイカズラ 初雪かつら 錦3 (470など)

現存する斑入り。今でも人気あり。

36. テリハノイバラ 錦いばら 錦1-7 (37)

現在ゴシキバラとよばれ白散り斑で美。

37. トクサ 深沢とくさ 錦2-4 (201)

現在でも栽培される。青山産。

38. ドクダミ 重やく 錦2-14 (270)

本図の品種は刷毛込みで、この型の品種はまだ珍しい。ふつうは覆輪タイプ。

39. トベラ 四軒ふくりん

錦2-3 (188)

この型は現在公園などに多く植栽される。亀五郎など4軒の家で発現したため四軒とよぶ。



トベラ 四軒ふくりん

40. ナギ 水の丸葉

錦6-4 (824)

現在は珍しい斑入りであるが、当時はひじょうに多かったようで、12ページにわたり図示。



ナギ 水の丸葉

41. ナンテン まえだなんてん

奇中-9 (141)

最近見られるようになったが、当時は斑入り品種が多かったようである。

42. ネズミモチ 今の黄布鼠もち 錦5-22 (818)

まれに現在似た斑入り品種を植栽する。

43. ノブドウ 錦ぶどう 錦1-24 (159)

現在ニシキノブドウとよび白散り斑が人気。

44. ハクチョウゲ 白丁花ふくりん 錦1-14 (97)

同様な斑入りが普通に生産販売されている。

45. ハボタン 葉ぼたん 錦1-20 (118)

今年のフラワーオークション
ジャパンのフェアで九州からの
完全覆輪のハボタンの展示があり、
発売するとのこと。本図と
同じタイプである。これまでも
ときには覆輪斑が発現したが、
保存が難しく消えている。



ハボタン 葉ぼたん

46. ハラン 近江葉らん、星葉らん、爪白葉蘭斑入 錦1-16、17 (106、108~111)

今でもごく普通に栽培されるハランですばらしい図で
ある。



ハラン 近江葉らん ハラン 爪白葉蘭斑入

47. ヒイラギ 黄金柊

奇付録-8 (379)

「その色至てうるはし」とある。カラーリーフ品種の
最初かもしれない。

48. フッキソウ 吉事草

奇中-19 (169)

現在でも普通に植栽される宿
根草。覆輪タイプから刷毛込み
斑まで見られる。



フッキソウ 吉事草

49. ベンケイソウ 弁けい草 錦1-29 (184)

この図の斑入りは中斑で今でも覆輪品種とふつうに植
えられている。

50. ホシケイラン きんけいらん

錦6-23 (957)

今でもふつうに栽培されている
星斑品種。



ホシケイラン
きんけいらん

51. マテバシイ 黄斑まで葉かし

奇付録-9 (384)

現存するとは思わなかった斑入り品種。三上常夫氏か
らいただいた。本図と斑はほとんど同じで貴重品種。

52. ムクゲ はちす白布 錦1-16 (90)

現存する品種。品種名は不明。

53. ヤツデ ふくりんやつで

奇上-11 (27)

現在もっとも多く庭植えされ
る斑入り常緑低木。図は見事。



ヤツデ ふくりんやつで

54. ヤブラン 麦門冬黄布

錦1-16 (102)

ふつうヤブランといいごくふつ
うの品種。



ヤブラン 麦門冬黄布

55. ユキノシタ はつれゆき

錦1-23 (116)

覆輪品種で似た品種は現存する。

二古書にはその他多くの現存種類、品種の図、解説が
ある。例えば、アカガシ、アザミ、イズセンリョウ、イタドリ、イチ
ジク、イチハツ、イヌワラビ、イロハモミジ、イワキ、イワヒバ、イワレン
ゲ、エビネ、オウバイ、オオバコ、オモト、カイドウ、カキツバタ、カキド
ウシ、カキノキ、カナメモチ、ガマ、カヤノキ、カンチク、キキョウラン、
キリンカク、コウゾ、コクチナシ、サギソウ、サクラソウ、サクララン、サ
ザンカ、サンショウ、シキミ、シャクヤク、シャリンバイ、シュラン、シ
ンビジウム、スギ、スミレ、ダイダイ、ダルマガク、チドメグサ、ツゲ、ツ
ツジ類、ツルウメモドキ、ツルドクダミ、ツルニチニチソウ、ドウダンツツ
ジ、トサミズキ、ナツツタ、ナワシログミ、ヌルデ、ハコネウツギ、ハナシ
ョウブ、ハナミョウガ、ハマボウ、ヒサカキ、ブッソウゲ、フトイ、ホウチ
ャクソウ、ホオズキ、ボケ、ボタン、マサキ、マツ、マンリョウ、ムラサキ
オモト、ムレスズメ、モッコク、ヤブカンゾウ、ヤブコウジ、ヤブサンザシ、
ヤブニッケイ、ヨモギ、ヨメナ、リュウノヒゲ、ワレモコウなどがある。
今世紀のわれわれにとって、これらの200年前の江戸時
代に発現している生きた文化遺産の再認識および保存
は、重要な課題の一つであると信じる。

日の丸ブリーダーの一人として —新規参入企業のサバイバル育種—

キリンビール株式会社 アグリバイオカンパニー

竹 下 大 学

日の丸ブリーダー

一般的に日本人は革新的な技術あるいは商品を生み出すことが不得手だと言われている。一方で応用力は世界随一であるとの折り紙つきであり、その事例は枚挙に暇がない。では花の育種に関してはどうか。そう、それこそ世界に先駆けて革新的な商品(品種)を次々と生み出している日本の数少ない得意分野の一つなのだ。『日の丸ブリーダー』、私は敬意を込めてこの道の先輩達をこう呼び、目標としてきた。

事 件

04年7月30日、私はカナダにいた。All-America Selectionsが毎年開催するサマーミーティングに初めて参加するためだった。当初参加予定ではなかったのですが、社命で半分は仕方なくという感じだった。たまたまPan-American Seedでの定期打合せの後でちょうど良く日程が組まれていたため、参加を断る理由がなかった。個人的には期間中のStokes Seedsのフィールドトライアルが楽しかった。新規参入企業にとって異国の地での露地栽培データは欲しくても得難い情報だからだ。

Stokes Seedsでは、太平洋戦争中に敵国の会社であるサカタのタネの遺伝資源(種子)を預かって戦後に返してあげたことがある、と誇らしげに語った社長の話が心に残った。『坂田武雄と父の友情がそうさせた』ということだったが、国益よりも人類全体の利益が上位概念であると判断した先代社長の決断力は凄い。種苗業界のシンドララーあるいは杉原千畝と呼べる人がカナダにいたことを初めて知った。私も業界人の一人として若い世代にこの美談を語り継いでいきたい。

その晩のことだ。打ち上げのディナーが終わりに近づき、事務局から今年新設された賞があるというアナウンスがあった。これまでAASでは品種のみを表彰

してきたが、今後はブリーダーも表彰することにしたとのこと。AAS Breeders' Cupという賞を設け、北米の種苗産業の発展に貢献した品種を育成したブリーダーを毎年1名選出するのだという。『へえ〜、そうなんだあ。一丁将来この賞を狙ってみるか』とほろ酔い加減の私はぼーっと聞き流していた。

その直後にまさか自分の名前がアナウンスされるとは。後にも先にもこの時ほど驚いたことはない。条件反射的に立ち上がったが、頭の中は真っ白。最初に考えたことは『どうしよう、スピーチ。まずい、英語!』。演台に立って途方に暮れている私を見かねて、米国駐在のKさん(Waveの名付け親)が英語の原稿を手渡してくれた。実はみんなは知っていたのだ。思わぬところでアメリカ流のサプライズパーティーを私は体験できたわけだ。

初代受賞者に選出された理由は、①Purple WaveのAAS入賞を皮切りに次々と新品種を上市し、ホフク性ベチュニアという新しいカテゴリーを確立したこと、②一般消費者メリットを迫及した育種をし、業界に新しい流れをもたらしたこと、③ベチュニアだけでなく、ニチニチソウでもAAS入賞品種(First Kiss Blueberry)を育成したこと の3点であった。

その夜は入社以来のいろいろな出来事やお世話になった人達のことが思い出されて、よく眠れなかった。『まさか自力で内定を貰えたとは思ってないだろうな。お前がキリンに入社できるのはこの業界で活躍してきた先輩達のお陰だ。それを忘れるな!!』と、就職内定を報告した際におめでとうも言わず、険しい顔でこう告げた安藤先生の顔も思い出した。『今回は先生もおめでとうと言ってくれるかな』、この日は私にとって日の丸ブリーダー代表チームに仲間入りできたことを実感できた日ともなった。ちなみに今年の第2代受賞者は、スナップエンドウの Calvin Lamborn 氏であった。



AAS Breeders' Cupを手に

幸運 1:

植同、花卉研、植物バイオブーム、バブル

植物同好会にはS君に誘われて入会した。植物で遊ぶ、そんな雰囲気がとても居心地良かった。実は教養部の花壇を管理する代わりに、大学の経費で各種苗会社の種子を自由に購入できるという特権があったのだ。いろいろ試したが、手がかからずに長期間綺麗な状態を維持できる品種は本当に少なかった。最新品種であっても欠点を多く抱えていることは、栽培してみて初めてわかった。また信じられないくらい植物に詳しい先輩や後輩がいて、自分の知識の無さを痛感させられたのもこの頃だ。

花卉研は横井先生が教授、安藤先生が助教授、上田先生が助手の体制だった。当時の雰囲気はまさに業界人予備校。業界情報はもちろん、やる気、熱気、殺気に満ちていた。今私が世界中のライバル達と互角に戦えるのは、このような環境でいつの間にか鍛えられていたからだろう。ブリーダー志望ではあったが、当時の種苗会社は徒弟制度的な部分がまだ色濃く残っており、私にはとてもついて行けないと思った。バブル真っ只中で異業種企業が多数参入していた頃だ。お陰で労せず内定をもらえた。89年4月入社。配属は栃木県にある植物開発研究所。その前身はビール原料（ビール大麦とホップ）の研究所であった。

幸運 2: キリンビール、ペチュニア

期待に胸を膨らせて着任したが、すぐに違和感を覚えた。『テクノロジーオリエンテッド』の御旗の下

で、当時は事業の根幹である品種や商売の仕組みについて無関心な人が多かったからだ。

最も幸運だったのは花に関しては入社1年目からお山の大将になったことだ。これも千葉大学園芸学部ブランド力のお陰だ。上の人から何でも訊かれる立場は新入社員にとっては辛い、これほど力をつけるチャンスはない。B級程度でも1000属検定で詰め込んだ知識は随分と役に立った。

自由な職場ではあったが、不便なこともあった。与えられた温室はわずか9坪。2年目には30坪に広がったが欲求不満が募った。施設園芸という感覚が会社には無く、品種は実験室から産まれてくるという雰囲気だった。パイオブームに踊って参入した会社はほとんどが数年以内に撤退した。すべて土から気持ちが離れ過ぎていたことが原因だと私は結論付けている。キリンの場合は原料育種の伝統があったことが幸いした。

高校生の頃からベディングプランツは何でも好きだったが、嫌いな花が一つあった。ペチュニアだ。アサガオの栽培に凝っていたことが影響したのだろう。ピロピロとした花やまとまり感のない草姿が気に入らなかった。キリンでは88年に安藤先生の勧めで育種を始めることを決めており、野生種の収集を開始していた。そして何の因果か、私一人が担当することも決まっていた。

89年はペチュニア、カリブラコアの区別無く交配しまくった。目的はただ一つ。ペチュニア育種の将来性がないことを証明し、自分の好きな花の育種にシフトするためだ。この年に商品化されたサフィニアが同業酒類メーカーであったことも、後々の社内調整に面倒が起ころうであろうことを容易に予想させた。不可能であることを証明するには組合せは多いほど良い。幸い空き圃場は十分にあったため、翌90年には気合を入れて全F₁の圃場検定を行った。ところがだ。梅雨の最中に予想外の衝撃的な光景を目にすることになる。コントロールの園芸品種がすぐに見苦しい状態になり梅雨明け直前には枯れあがったのに対し、一部の組合せが驚異的な耐雨性と生育を示したからだ。

これを契機に私はあっさり宗旨変えし、ペチュニアのF₁育種にポジティブに取り組むことにした。その後は毎年予算獲得に知恵を絞った。育種に必要な資源配分（ヒト・モノ・カネ）だけでなく、その費用対効果について論理的に説明する良い訓練の場となった。ビール会社では種苗業界の慣例などは説得材料にならな

い。何をするにもゼロからのスタート。しかし知らないことは強みにもなる。まずは自らの企業風土に誇りを持ち、勝ち目はあると信じ行動に移すことが重要だ。

幸運 3:

AAS、Pan-American Seed、知的財産権

ホビーブリーディングがあるように新品種を作るのは簡単だ。しかし新品種で儲けるのは容易ではない。種苗業界の話である。信用ない、生産できない、販売できない、の三重苦のビール会社には八方塞の状況だった。後に Purple Wave と命名される F₁ 品種を何とか作るとは作ったが、その先の手が無い。儲け云々以前に信用を得ることが先決だ。

そこで目をつけたのが AAS 出品であった。エントリーは 93 年。めでたく入賞内定を果たし、国際的に品種の信用を得た。ところが 1 kg の種子を確保できなければ資格取消だという。次は生産能力の評価だ。図らずも 94 年には種子生産を自力で立ち上げなければならない状況に追い込まれた。生産は体制を整えるまでは育種よりも数段大変であることを身をもって知ることができたのは、貴重な経験となった。

規定量を満たした後は販売のパートナーをどうするかだった。果たして Purple Wave の販売権は入札の形で決めることとなり、その結果 Pan-American Seed がパートナーとなった。この提携の最大の収穫は Ben Walraven 氏との出会いだった。停滞気味の Pan-American Seed に化学メーカーから転職した氏は、当時マーケティングで業界に新風を巻き起こそうとしていた。しかし社内には一般消費者が一目で違いを認識できるような品種なんぞはなかった。だからこそ彼は Purple Wave に賭けられたのだ。開発コストが一切かかっていない導入品種であることを理由に、多額のマーケティング費用を捻出することなどなかなかできることではない。自前主義からの決別。その後の同社の発展は、彼のこの決断がターニングポイントとなったに違いない。かくして Wave は世界で初めてテレビ CM をうち、ホームページを立ち上げた品種となった。

今や Wave は世界で最も消費者認知度の高い品種だ。Wave、Tidal Wave、Easy Wave、Double Wave とシリーズ展開し、今なおブランド力を高め続けている。なお Wave と Ride the Wave はキリンがほぼ全世界で商標権を押さえている。育種プログラム×商標権の相乗効果は確実に利益に反映されており、参入障壁を高める

効果も大である。種苗業界においても、今後ますます知的財産権の生かし方が重要な事業戦略となることは間違いないだろう。

サバイバル育種

全世界に自社農場を構えているサカタとタキイはやはり凄い。海外出張の度にそう思う。当社は足元にも及ばない。買収した子会社を欧米に有してはいるが、同じ土俵で勝負すること自体が無謀だ。ビール会社ならではの動きで勝ちを拾う、これしかない。

商業育種はエンドレスの駅伝だ。誰かからタスキ(育種プログラム)を託され、それをまた誰かに託す。その繰り返しが品種改良の成果となる。勝ち目が無ければ途中棄権したほうが賢い。本物の駅伝とは異なり、途中から参戦できるところが面白い。儲かるレースだと途中参加のチームが一気に増える。総合力で劣る新規参入育種会社は一度落伍したらお終いだ。どうやって先頭を走り続けるか、将来を見越したペース配分をあらかじめ練っておかなければならない。給水(育種素材の補充)の重要性は言うまでもないが、独自のサポート体制を含めたチーム力をどのように強化していくかが一番の鍵となる。老舗育種会社の弱点はおそらく分業体制が完全に確立されていることにあるはずだからだ。

世代間競争歓迎、個人育種家台頭歓迎

最近、脱サラして温室を借り、花の生産を始めた若き経営者達に会う機会ができた。私が彼らの年齢の時には端から無理だと思った選択肢で、その行動力がとても眩しい。彼らの強みは明確なビジョンと経営感覚を持ち合わせていること。必ずや業界に新風を巻き起こしてくれることだろう。

新規参入企業に属する者の務めとして、私ももっともっと業界に新しい波をおこさなければならないと決意を新たにさせられる。また日本の個人育種家の品種がもっと世界市場で認められるためのうまい仕組みも作りたい。こと栄養系の品種を紹介することに関しては、Fides という育種・生産子会社を持つ当社は最も良い窓口となり得るはずだ。老舗育種会社、新規参入育種会社、個人育種家のそれぞれが、競うところでは競い、協力するところでは協力しあうことにより、今まで以上に日の丸品種が世界市場を席卷するようになることを願ってやまない。

◆ 付録：私が出会った先輩ブリーダー達プラス1

● Mogens Olesen 氏 (Poulsen、ミニバラ『バレード』シリーズ)

私が最も影響を受けたブリーダーである。92年にセントラルローズナーセリーの大西社長を Poulsen にご案内した際にお会いした。ガーデンローズのさえない老舗育種会社をミニバラで一躍時代の寵児にまでしてしまった人だ。初めて会うプロのブリーダーだっただけに、何でも吸収してやろうと意気込んで臨んだ。幸いオーナー会社で若手のブリーダーなどいなかったためか、後輩を指導するような感じで接していただけた。

実際は育種の話が主ではなく、Poulsen にとっては新品目であっても後発のポットローズでどうやって儲けるか、そのアイディアと実践について熱心に説明してくれたのだ。『品種のプロモーションまでをも最初から想定して育種をしているブリーダーがいるんだ』目から鱗が落ちた。育種会社と生産会社の業務提携、生産者の選別、品種のブランド化、マーケティング手法、どれをとってもなるほどと頷かされた。実際に Poulsen と Ove Nielsen ナーセリーの関係をモデルにして、現在のキリンと Pan-American Seed との業務提携が生まれたのである。その後ご縁がないが、いつかお礼を述べたい。

● 松永 一 氏 (星花園、バラ咲きポリアンサ『プリムローズ』)

良くも悪くも生産者育種の先達である。10年以上にわたってキリンの契約ブリーダーとしてご活躍頂いた。無から有を生み出す力は氏の花に対する愛情のなせる業であり、到底私の及ぶところではなかった。温室をご案内頂く度に、想像を越えた植物の変化を目の当たりにさせて頂けるのが当時一番の楽しみだった。氏のお陰で、実は種苗会社の論理を越えた世界もありだと思えたことが私の強みかもしれない。

● 故 Cloude Hope 氏 (元 Linda Vista)

インパチェンスを園芸化したことを筆頭に育成品種多数。伝説のブリーダーである。加えてコスタリカでの種子生産を立ち上げた業績も特筆される。

98年に2度目のカリフォルニアバックトライアルに行った際に、Pan-American Seed でお目にかかることができた。ちょうど客足が途絶えた時だったために、しばらくお話しさせていただいた。生き神様的な方との予想もしない面会に緊張した。その時私の『これから伸びる品目は何だと思うか?』の問いには、『ポット用のトルコギキョウ』と即答。翌日から、Mr. Hope と会話したこと、今度はトルコだってよ、というのが私の自慢話になった。これ聞いた相手すべてが決まって『彼が言ったのならそうなる』と答えたのにはビックリした。

● Henk Dresselhuys 氏 (元 Royal Sluis、矮性コスモス『ソナタ』)

Royal Sluis が Pan-American Seed に買収された際にクビとなった (ブリーダーは全員解雇!)。その後、Dummen、Benary、コンピューター会社と渡り歩き、2000年にキリンの子会社である Fides に育種マネージャーとして着任した。

私にとっては待ちに待った身内の先輩ブリーダーであった。長年大手育種会社に戦いを挑み続けてきただけあって、彼の商業育種論には全く隙がない。マネージャーとしての立場で、種子系の育種手法をスプレーム、カランコエを始めとする Fides の栄養系品目の改良に生かしてくれている。その成果は既に形として表れている。請うご期待、だ。

● Konrad Wagner 氏 (元 Benary、パンジー『バハラジャ』)

私が最も衝撃を受けた品種は、一世を風靡したオレンジ色のパンジー『バハラジャ』だ。あの色を初めて見た時の感激は今でも鮮烈な記憶として残っている。花は嗜好品である以上、一般消費者に説明不要で目新しさが伝わる品種を誰かが商品化し続けなければならない。だからプロにしか違いがわからない品種を作るのは本来新規参入育種会社の仕事ではないはずだ。キリンからは面白い品種が出てくる、そう消費者に期待してもらえだけの会社になりたい。ご本人には01年の Fleuroselect 総会で思いがけずお会いできた。

● 中川雅博 氏 (サカタのタネ、パンジー『アリアル』シリーズ)

学生時代にとても親しくさせて頂いた先輩。育種学研究室から三井石油化学工業に就職。その後にサカタのタネのブリーダーになられた。異なる企業風土をものともせずトップブリーダーにまで登りつめた情熱と、陰の努力は並々ならないものだったに違いない。花の育種だけではなく、後輩ブリーダーの育成を含めて勝手にライバル視させて頂いている。

● 故 Luther Burbank 氏

言わずと知れた植物育種の神様。私のヒーロー。日本ではごく一部のみにしか知られていないのが残念だ。もし今の時代に彼が生きていたら、私を筆頭に多くのブリーダーは失業を免れないだろう。現代技術を駆使して一体どれだけ効率的に、またどれだけ多くの画期的な品種を育成してしまうことだろうか。それを想像するだけでも楽しい。ただ最近、彼の名前すら知らないブリーダーが増えてきているのが気懸りだ。

サントリーグループの花事業への取組み ～異業種新規参入から16年～

サントリーフラワーズ株式会社 主席ブリーダー

村 上 保 之

1. 新規事業としての立上げ、異業種からの挑戦

私がサントリーに勤め始めた80年代中ごろ、好景気を背景に日本の各企業は研究開発に潤沢な資金をつぎ込んでいました。中でも人気の高かった一分野がバイオテクノロジーでしたが、その植物分野での適用先として様々な業種の企業が花の事業プランに取り組みました。将来の事業拡大という狙いはあったものの、当時はとにかく新しいことを始めればよいという風潮で、プランの実現性・収益性が詳細に検討されていたものはあまりなかったように思います。その後景気の後退とともに、採算の取れない事業プランは次々と消滅していきました。

しかしその中の数社は花の事業を立ち上げ今も継続しています。その一つがサントリーですが、こちらも事業を始める頃に綿密なプランが練られていたかというところでもありませんでした。メーカーの習慣として商品の製品当たり損益計算はしていましたが、これがどのくらい売れるかは経験のない者には予測できませんでしたし、議論しても意味はなかったでしょう。それではサントリーの花事業はどうして持続可能なものになったのか、事業の中身を紐解いてご説明したいと思います。

サントリーでは花の事業に取り組む以前から飲料の原材料などのためにバイオ関連研究の下地がありました。80年代には世間のバイオテクブームもあって新規のバイオ関連プロジェクトが始められましたが、そのひとつが花の事業開発を目指したものでした。

1986年には最初の花苗製品サフィニア3品種が京成バラ園芸(株)との共同研究の中で育成され、88年の発売を狙って生産を始めたのですが、最初はウィルス感染の問題が発生して作りかけた製品を廃棄しました。翌89年には売り出したものの、業界では「挿し木でふやす下垂型のペチュニア品種で、しかも花のついていない苗なんて誰が買うか、売れるわけが無い」と、厳しい意見をいただきました。それでも何とかなるだろ

うと関係者は楽観的でした。その理由のひとつは試作したサフィニアの素晴らしさだったと思います。もうひとつは社風でしょうか。創業者の口癖であったという「やってみなはれ」という言葉がサントリー内では今も聞かれます。まさにその精神、意気込みで花の事業化は進められました。また、世間一般が好景気で賑わっていた頃から当社ではウィスキーの消費伸び悩みを背景に他社よりも新規事業が切望されており、この情勢も新規事業への後押しとなったように思います。



サフィニア発売当初の
カタログ

順調とも見えなかったサフィニアでしたが、関心を持っていただけた数社の協力を得て店頭に置いていただく と 大方の予想に反して消費者に受け入れられ、国内外で売り上げを年々伸ばすことができました。後にご説明する育種、品質訴求、積極的なマーケティング活動などの結果、発売から16年が経過した今もサフィニア・Surfiniaは認知率の高いブランドです。以降タビアン、花手毬、ミリオンベルから最近のフィオリナ、キャンディボックスなどまで、いくつものブランドを打ち出しながら幸運にも事業を拡大することができました。2003年には花事業が軌道に乗ったと判断をして、それまでサントリー(株)内の一部署であった花事業部を分社独立して、サントリーフラワーズ(株)を設立することができました。

もちろん社内の自助努力だけではこのように事業を続けることはできませんでした。製品をご愛顧いただいたお客様、育種開発活動にご協力いただいた関係先、生産委託先、製品をお取り扱いいただいた取引先の皆様のご支援があってこそ事業を育てることができました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

以下にどのような取り組みを進めてこの事業を推進してきたかを具体的にご説明します。

2. 事業の組み立て

(1) 育種開発

サントリーの製品開発で商品コンセプトを設定するに当たって顧客と考えるのは常に末端の消費者です。従って最重視するのは所謂ガーデンパフォーマンスで、これが製品の特徴となっています。その他の育種開発の特徴では生育の早い草花を対象としながら栄養繁殖品種を狙っていることです。種子繁殖品種の育種は固定系にしてもF1系にしてもまったく新しい品種を育成するには相当時間がかかります。それに比べ栄養系の場合は特別な1個体を選んだ時点で育成がほぼ完了したことになるので種子系に比べて時間がかかりません。最近特にそうですが、企業の経営にはスピードが必要とされます。食品事業のスピードが基本の当社では種子品種の育種の時間軸はしっくりしません。当社のような場合、回転の速い栄養系育種のほうが求めるスピードに近づけます。

最初の製品はサフィニアですが、それ以前のペチュニアの育種が矮性、早生（生産者メリット）を追求していたのに対して、サフィニアの育種目標はとにかく育てやすく這い広がって大きくなりながら咲き続ける（消費者メリット）、という点でした。おまけに花の色はペチュニアの世界（？）で重視されていなかったマゼンタが主力、挿し木繁殖する品種、ということでどれをとっても業界常識から逸脱していました。このような商品はすでに経験と歴史を持ち合わせていた既存の種苗会社の中ではきっとお話にも上らないものだったでしょう。常識の無いビギナーだったからこそ、進めることができたブランドだと思います。

著者自身は誰も園芸化していなかった *Calibrachoa* を数年かけて育種し、最初の園芸品種ミリオンベル2品種を1992年までに育成し、94年に発売しました。当初は初めて園芸化された植物種ということもあり、生産現場やお客様の手元でうまく育たないことも多

く、売り上げは思うように伸びませんでした。それでもその新規性が話題となり、花色が鮮やかな赤で開花特性に優れる『ミリオンベル・チェリーピンク』の発売（95年）を契機に Million Bells ブランドは世界中に普及していきました。その背景には栄養系品種生産の仕組みがサフィニアのおかげで急速に進歩、普及していたことがあったと思います。他の育種会社でもこの動きを見て *Calibrachoa* の商品化が盛んに進められ、この10年ほどで一般的な園芸品目となりました。我々が最初に園芸化を果たした *Calibrachoa* が花卉産業界で確固たる地位を築いたことは喜ばしいことですが、厳しいシェア争いに我々も巻き込まれています。



写真もほとんど育成者である著者が撮影した手作り風の発売当初のミリオンベルのカタログ

サントリーは以前には園芸化されていなかった植物種を育種し商業化することにいくつか成功しています。その育種開発素材として野生種が必要となる際にはいつも原生地のカウンターパートナーと必要な契約を結び共同で活動をしています。これは野生生物も各自生地資源であると規定した国際条約・生物多様性条約のポリシーに則ったものです。最近ではアルゼンチンやインドネシアの研究機関と連携した活動などがあります。

加えて通常の交配育種以外に突然変異を利用した育種を多用しているのも特徴です。サントリーが扱って

いるような栄養系品種においては優良品種の形質をほとんど残し、花色など一部の特性だけが変異した突然変異品種は実用性が高いのです。近年は効率的な突然変異誘発の手段として重イオンビームを活用しています。(財理化学研究所が保有する強力な照射設備が植物への照射を始めた頃から、当社は様々な試みを共同で実施させていただいています。もちろんこのような人為誘発を行わない場合でも大量増殖の現場ではしばしば突然変異が発見されます。これは安定生産には支障ですが、新品種発見につながることもあります。

また、豪州で同様の栄養系育種をしていた種苗会社と新会社 BONZA BOTANICALS を今年合併で設立し、取り扱い品目をさらに増やすとともに季節の異なる南半球に育種拠点を得ました。

(2) 知的財産権

サントリーが扱っているような植物製品の多くはそれ自身をふやして商業利用することが可能であり、開発者としての権利を守るためには知的財産権の確保が必須です。サントリーでは花製品は国際商品であると認識し、市場と捉えている各国・地域で品種権を申請・取得しています。重要な市場である欧州を含めると国数は相当多く、品種数が多くなった現在での出願作業を含む知財管理はきわめて煩雑ですが、事業基盤であると位置づけ管理を進めています。

(3) 製品品質の訴求

挿し木ができるのだからそれでふやしてみよう、とペチュニアを挿して始まったサントリーの生産ですが、規模を拡大しながら年数を重ねる中で数々の困難を解決してきています。

第一に注意が必要なのはウィルス病です。サフィニア生産の当初から被害がありました。現在では増殖の元とする母本は数十種のウィルスについてエライザ法(酵素結合抗体による検定)で検定して欧州で規定されている最も厳しいクリーンレベルを確認しています。必要に応じてPCRによる遺伝子検出や電子顕微鏡によるウィルス粒子検査も実施しています。クリーンであることが確認されたものは組織培養で保存してクリーン度の維持に努めています。これが生産の出発点となり、社内での母本増殖、熟練生産者に製品生産を委託しています。最終の製品まですべて自社管理の下で生産しているのも大きな特徴です。年間2000万本の苗をこの仕組みで生産しているわけですが、クリーンで均一な苗製品をあらかじめ設定した出荷日に合わせ、設定した商品スペックにあわせて多くの委託先を通じて作り上げるのはたいへん難しいことです。経

験を礎にした技術、仕組みの改善なくしては現在の品質は実現できません。

(4) 国内での製品形態と物流

サントリーでは製品パッケージの構成をビールなどと同じに考えて組み立てました。①ブランド名の入ったラベルを各製品に付ける、②専用のダンボールケースに入れて配送する、③製品とトレイだけでも店頭が飾れる、といった点です。今は小売店様の店頭も様々なラベル苗で占拠されていますが、最初に大々的に押し進めたのはサフィニア製品でした。

この苗製品をケース単位でご注文の際にお約束した日にお届けしています。苗の仕上がりを眺めながら物流コストを抑えるように配荷を割り当てるのはたいへん難しいことですが、何度も改良を重ねた独自のシステムを構築して対応しています。

(5) 国内マーケティング、代理店制度

製品ラベル、店飾POP、雑誌など様々な媒体への宣伝を活用してブランドを育ててきましたが、このブランドを中心においたマーケティングにはサントリーが洋酒、ビールなどのために培ってきたノウハウが生かされています。サフィニア以前には一部のバラ品種などでは品種名称がブランドのように扱われていたことがあったと思いますが、たかが草花に仰々しくブランド名を付けたのはサフィニアが最初でした。それ以前は消費者にとって *Petunia* は何でも「ペチュニア」でした。ブランド名は単に名乗ればよいだけではなく、商標として権利化しなければ独占性が確保できません。当社のブランド名は国内外で商標登録していますが、この手続きもまた相当のコストをかけながら行っています。

当社の営業部門は10人以下で全国を対象に活動しています。そのためには代理店と協力しての取り組みが不可欠です。売上げが伸びてからも代理店数をむやみに増やすようなことをせず、相互メリットのある関係を築いています。



酒販店などで培ったパターンを適用した店頭づくりのご提案

(6) 海外ライセンスビジネス

欧米は日本以上に巨大な市場です。またオセアニアにも小規模ながら同様の市場があります。サフィニアプロジェクトでは当初から海外への品種ライセンスを試みてきました。現在ライセンス販売合計で年間1.5億本程度まで伸ばすことに成功しています。

各地域では日本同様のブランドマーケティングを展開し、ライセンスネットワークを張り巡らせて広大な地域の隅々まで商品が行き渡るよう努めています。世界中、隅々に商品をお届けするという点で優れた仕組みになっています。

このライセンスシステムをさらに活用しようと考え、社外の育種家が育成された品種もこの仕組みに乗せ始めています。日本の企業としてこの仕組みを通じて、特に日本の優れた品種を海外に紹介することができればこんなに嬉しいことはありません。



ロンドン街頭でのサフィニア植栽事例

(7) 切花ビジネス・青いバラ



青いカーネーション‘ムーンダスト’

ここまでご紹介した花苗ビジネスとは別に、サントリーはオーストラリアのベンチャー会社 FLORIGENE と1990年以来協力して遺伝子工学を駆使した切花育種を進めています。青いバラを目標とした研究開発は紆余曲折、時間がかかりながらも着実に進められ、青いカーネーション Moon dust シリーズを開発して1994年に発売しました。サントリーフラワーズはこれまで苗売りで培ってきた物流、商流、マーケティングの仕組みを適用してこの切花商品の日本国内での販売を展開しています。

さらに今年、ついに『青いバラ』が開発できたことを発表できました。現在これは鋭意増殖中ですが、近いうちにこれを発売して人々に新たな感動を与えたいと考えております。

3. 今後、ビジネスの拡大に向けて

サントリーグループの連結売上げは現在1.3兆円ですが、そのうち食品・酒類が1.2兆円です。その他の新規事業合計は1,000億円。花の事業はその新規事業のうちの50億円を占めるに過ぎません。おかげさまで当社の花製品を店頭で見かけることも多くなりましたが、その事業規模は食品の規模の大きさに比べると未だに桁違いに小さいのです。

当社だけの事業規模ではなく、花産業全体をもっと拡大できないのでしょうか？ 生活必需で毎日消費していただける飲料・食品と花苗はまったく異なるもので市場拡大は難しいとの意見もあります。それでも消費頻度はもう少し上がらないでしょうか。また、今は生活に花を取り込んでおられない方に園芸を始めていただくことはもっと重要でしょう。もっと人々が花で生活を彩る豊かなものにしていただくことがこの産業にとってもっとも大事なことを考えます。

当社としても国内ではもっとエンターユーザーを増やす努力をしていきたいと考えております。特に落ち着いた生活を志向される中高年層は主要なお客様となるはずですが、その層にも花未経験者が未だたくさんおられます。よく言われているように園芸産業に高齢化は追い風に違いありません。

また海外でも商売できる体制を整えてまいりましたので、当社以外で育成されたものを含め日本の品種をもっと世界市場に紹介していきたいと考えています。

一社でできることは限られているのですが、ここまで築いてきたビジネスシステムを磨き上げ、世界を相手に日本の花卉産業全体の成長と共に事業を伸ばしていきたいと考えております。

園芸古書の解説 III ～岩佐蔵書より～

岩佐園芸研究所
岩 佐 吉 純

(「花葉」23号p27より続く)

13-1) (写真49) Paxton's Magazine of Botany 16 Vol. (1834～1849) Paxton, Joseph (1803-1865) 著

Paxtonはガーダーナー・建築家。第1回万国博で水晶宮を作り成功。後ナイトの称号を受ける。ガーデナースクロニクル創設の一人。デボンシャイヤー公爵のチャッツワースの園芸主任。温室を完成。ビクトリア 大鬼蓮を栽培。開花させることに最初に成功した。

Vol.1 7p. (写真50) *Petunia violacea* = *P. integrifolia*
1830年フランスのジョン・ツィーディが発見。現在のペチュニアの片親。

13-2) Paxton's Flower Garden (写真51)

3 Vol (1850～1853) John Lindleyとの共著

Vol.2 49p. *Cantua buxifolia* (写真52) オーストラリア原産。

13-3) (写真53) Paxton's Botanical Dictionary

(写真54) 1868年刊。623p.

種の導入の年代が非常に詳細に記録されていることに驚く。



写真49



写真50



写真53



写真51



写真52



写真54

13-4) (写真55) Practical Treatise on the Cultivation of the Dahlia

1838年刊。ダリアの栽培および歴史の貴重書といわれる。

14-1) The Ladies Flower Garden of Ornamental Perennials Loudon, Jene Wells 著

1848年刊。

1830年著名なガーデンライター J. C. Loudonの妻。女性に分かりやすい本を作る目的で、Lady's Flower Gardenシリーズを続刊。1840年一年草、1841年球根類、

1848年宿根草を発行。発行日付がないが温室植物とともに後世に残る出版となった。これらの画は彼女自ら主に描いたといわれる。

1848年 (写真56) Ornamental perennials PL23 1. Picotée Emneliae 2. Picotée Princess Frederick 3. Carnation Bijou de Clement 4. Prince de Nassau

N : d (写真57) Ornamental Greenhouse Plants

PL39 Lisianthus russelianus

注：1835年 John Tweedii がメキシコにて発見し、英国に送った。



写真55



写真56



写真57

**15-1) (写真58) Illustration of Himalayan Plants
Hooker, Joseph Dalton (1817-1911) 著**

1847～51年シッキム、ヒマラヤ、ネパールに調査のため遠征。父 Hooker, William Jackson の見出した石版工人 Fitchno の石版で作成している。1865～85年、Kew 植物園長の Javkson Benjamin Daydom の助力を得て、Index Kewensis 2 Vol. (in4) 1893-95 を完成させた。1873年 RHS 会長。1877年 Knight の称号。1865～1904年 Curtis BM の編集にあたる。



写真58

T19 (写真59) *Rheum nobililo* セイタカダイオウ

T8 (写真60) *Meconopsis simplicifolia*

16-1) (写真61) Nederlandsch Bloemwerk

著者不明・1794年刊。17・18の2冊の本とともにオランダ発行の銘著といわれる。この本は18世紀終わりのチューリップ、ヒアシンス、オーリキュラ等の拡販、オランダナーセリーマンの支配権の演出とみられている。銅版画。

T48 (写真62) *Primula auricula* 1596年スイスにて発見。グルーノ教徒によって欧州に広がり、またフローリストの花として労働階級によって改良が進められた。

T17 (写真63) *Viola lutea grandiflorum* 1794年頃のこの本に青花パンジー大輪があったことは驚きである。



写真59



写真60



写真61



写真62



写真63

**17-1) Florilegium Harlemense Colored Description
of Bulbous and Tuberous Plants**

De Ervan Loosijes 著 1896 ~1901刊

当時の球根の本のベストセラー。120図版 完全な球根の本。絵は Mr. A. Goossens ブラッセル

T30 (写真64) *Anemone coronaria flore pleno*

T44 (写真65) *Tulip Duc van Tholl*



写真64

18-1) (写真66) Album Van Eeden

A. C. Van Eeden & CO. 著 1872~81刊

Mr. Van Eeden は最初のハーレムの花店。ハーレムは球根の生産地としては初期に行われた。ブラッセル G. Severeges の石版。

T71 (写真67) *Cyclamen hederifolium 'Flore albo'*

T78 (写真68) *Gladiolus floribundus*



写真65



写真66



写真67



写真68

の間に、250万円の花き予算は5億円近くに拡大することができた。この間に私が手がけた事業として、フラワーセンター、花き総合種苗センター、花き集団産地、花き流通センターを新設し、情報法として「花き情報」の創刊も楽しいものだった。

沖縄そして新品種保護制度へ

昭和51年5月に沖縄総合事務局に出向が決まり、関東・東海地域の大学、試験場、普及の花き関係者が有楽町交通会館で送別会を開いてくださり、さらに2年後の本省帰任の時にも同様に歓迎会をしていただいた。それを契機に、以後毎年「華の賢人会」が開かれるようになった。当時呼びかけをしてくださった岡田正順先生はじめ多くの先輩の皆様に感謝申し上げたい。

沖縄では国際海洋博が終わった直後で、県は農業振興と観光、基地を3本柱として力を入れることになった。沖縄版農業構造改善事業の中で、沖縄の天然の温室としての条件を活かした野菜、花きの産地づくりに全島を駆け回り、特に若手グループとの連携プレーに注力した。この間、本土の大学、試験場等の研究者や東京の卸売市場関係者の積極的な支援には感謝して余りあるものであった。

2年後、次の仕事として新品種保護制度をやりたいと本省に要望したところ、早速、果樹花き課種苗対策室に帰任を命ぜられた。

当時、国際条約（UPOV条約）に基づく新品種保護制度の法律改正を目指し、農林水産省と特許庁の間で厳しい調整が続く中で、農林水産省は新種苗法案の国会提出を進めており、着任早々、連日の深夜作業が待っていた。

曲折の末、国会最終日に可決成立し、7月公布、12月28日に施行され、新品種登録がスタートした。新品種登録へ向けて審査基準の作成、既存品種の特性調査が必要で、その作成には国、県の研究者、業界の花葉会の有識者が大変お世話になった。

54年に種苗課に昇格し、私は初代の花き審査官となり、58年まで諸先輩のご支援をいただきながら、充実した時代だった。また、審査官時代に農林水産省植物標準色表（カラーチャート）を横井政人教授や色彩研究所、国の野菜・果樹試験場の協力で完成させたことも記憶に残るものだった。

大阪国際花と緑の博覧会開催へ

昭和58年から2年間、畑作振興課で糖料班の課長補佐を勤めた後、昭和60年に再び果樹花き班担当課長補

佐を命ぜられた。

着任早々、大阪市が市制100周年記念として国際園芸博覧会を1989年に開きたいと地元の代議士を通じて要望があり、農水省、建設省、外務省、通産省、文部省の課長が呼ばれ、同席した。文部省は後に辞退し、4省で開催準備の勉強会をつくり、週1回ペースの大変な会議が始まった。

国際博覧会は条約により国が主導して関係国会議を開いて運営するルールがあり、閣議決定のうえ、国際博覧会事務局（在パリ・BIE）の承認を5年前に得る必要があった。

閣議では建設省と農水省が協力して担当すると決まり、以後開催までの5年間の4省会議では農水省と建設省との厳しい調整に明け暮れた。農水省では省内に国際博覧会対策室と、林野庁や関係局の連絡会議を設置する一方で、園芸関係団体の支援組織づくりと花の供給と展示計画、植物検疫との調整、実施組織の国際花と緑の博覧会協会の設立等、山のような仕事で忙殺され、帰宅途中、戸塚の駅から救急車で入院することもあった。

この間花き担当班長としての仕事が山積みし、特に本省に花き課の設置を計画し、組織要求を提出し、曲折の末、浜口農産園芸局長の尽力で花き対策室の設置が実現できた時の感激は忘れがたい。これに伴い花き担当課長補佐から国際花と緑の博覧会調整官に昇任、花博準備に専念することとなった。

平成2年3月31日に5年間の血の滲む準備により、開会式为皇太子殿下御臨席の下盛大に行われ、翌4月1日にテープカットが華やかに行われた。私は山本農水大臣夫人の案内を担当し、当日付けをもって36年間勤務した農林水産省を退職。6ヵ月の花博には1市民として数々の苦労を思い出しつつ楽しむことができた。

終わりに

退職後は5月から社団法人日本生花通信配達協会に常任顧問として就職し、現在も元気で、協会の組織改革に取り組んでいる次第である。

昭和29年に松戸を卒業して以来、52年間を振り返ると、農林水産省入省以来、果樹、野菜、花と各業界に関わり、多くの新しい事業に当初から取り組むことができた。その間、多くの素晴らしい上司、友人の指導と力添えをいただけたことは、本当に幸せな園芸人生だったとの想いに満たされているこの頃である。

私のビオラ育種

トキタ種苗株式会社 大利根研究農場

秋 山 泰 男

育種の目標を立てる

私は育種に携わっていたが、ビオラを手がけるのは今回が初めてである。なにぶんビオラ育種に関する知識が乏しかったため、手探り状態から始めたのが現状である。

その当時 F₁ 品種が出回っていたが、アルペン系（シンジェンタ）等を除き、ポットパフォーマンスを重視したコンパクトなビオラが主流であった。その中で新しいかたちを模索していたが、ビオラが本来持つパフォーマンスをどこまで最大限に引き出すことができるかを考えた。その当時ペチュニアの世界では、サントリーのサフィニア、キリンウエーブ等、匍匐性野生種を利用した品種が現れ、利用者する側はその圧倒的な生命力に惹かれていた。

育種において目標を立て、素材を選び、育種方法を考える時が一番面白く、思いついた時が私にとって至福の瞬間でもある。そこでビオラで育種素材を探していたところ、あるカタログに *Viola tricolor* の垂種である *macedonica* を見つけた。*macedonica* は黄色の単色で匍匐性はあるものの、開花の遅い、春咲き性で、そのままでは園芸的に使うのは難しい。そこで現在の秋咲き性で、多種多様な花色を持つ品種を交雑させて後代を選抜していくことを考えた。交配、選抜をしていくに従い、ビオラはかなり手ごわいものであると気づかされた。

macedonica は先に述べたように黄色の単色である。それに単色でアントシアン系の色素をもつ或る系統を掛け合わせたところ、当然 F₁ は単色になることを想定していたが、なんと上弁のみがアントシアン系の色素をもつ系統を生じた。側弁、唇弁には色が乗らなかったのである。

そういえば *macedonica* は *V. tricolor* の垂種である。*V. tricolor* は誰でも知っている三色スミレでありパンジーの主要な原種でもある。何気なく当たり前だと思

っていた花色、実はかなり特殊な遺伝様式を持つ。また赤色系、桃色系の花色を導入することに苦労した。なかなか冴えた色が出てこない。新しい花色を導入する際、パンジーとの交配も試みたが一部種子の採れる組み合わせもあった。いわゆるビオラとパンジーは染色体数が異なるとされているが、対合する染色体があり、その中で生き残る个体があるのか、不思議な現象でもある。その場合花粉稔性、採種効率に気配りしなければならない。

次に草姿である。先に述べたようにあまりにもポットパフォーマンスを重視し、コンパクトになった現在のビオラである。目標を、完全なる匍匐性ではなくマウンド型の横張り性とした。完全な匍匐性もそれなりの使い方があがあるが、株の周りに花が付き、中心部には花が付かないことがよくある。そのため株全体が花で覆われることを主題に育成した。またこれは店先で枝が絡み合わないこともひとつの利点である。ポットで購入し、その後グッと株が張る。春には株が35～40cm位には張る。

もうひとつの重要な目標は早生性である。今日本では、ほとんどのパンジー及びビオラは秋に花付きポット苗として販売される。そこでいかに早生性の血を入れ、どの時期に選抜すれば一番効果があるかを考え、選抜を行なった。

野生種を利用する場合基本的には、花色が野生型で優性の場合、花色が劣勢の園芸品種に掛け合わせ、野生種の草姿なり特徴的な性質を選抜し残し、遺伝的に劣勢の園芸品種の花色を、F₂ 以降に選抜することを行なう。

今回ビオラの場合、必ずしも野生種が花色遺伝的に優性ではなく、多少変則的な遺伝様式をしたのが多少手間取った。

ビオラ「F₁ シャングリラ」シリーズ

こうして生まれたのが、当社育成の早咲き、横張り

性ピオラ「F₁ シャングリラ」シリーズである。

2006年から販売予定であるが、ローズ、イエロー、パープル&イエロー、パープル、ホワイト、レッド、ビーコン、パープリッシュローズの8色をはじめに発表する。今後、毎年色幅を増やしていくつもりである。

秋咲き性で横張り性もあるため、7月中下旬に蒔けば9月下旬～10月上旬には十分出荷可能である。普通、コンパクトな早咲き系は株が出来ないうちに花が咲いてしまうことがよくあるが、「F₁ シャングリラ」は花を付けながらも株が張ってくる。この時期に苗を植え込めば11月には株張りが20cmを超え、春にしき味味えないようなパフォーマンスを秋から楽しむことができる。もちろん8月蒔きの普通栽培も可能である。選抜場所が埼玉県北部で、夏の酷暑下の育苗、あるいは冬の北西の季節風にも耐える。春先に株がだらしく立ち上がらないことも特徴である。

利用は、花壇植えはもちろんであるが、コンテナーの中心に比較的丈の高くなるものを寄せ植えしてもバランスが良い。

花の育種に携わって

なにぶん当社は、元来野菜の会社であり、花の育種を始めてから7年の歴史しかない。育種はもちろん、種子生産で海外にも飛ぶこととなる。その国々の文化気候にふれ、採種会社のレベルの高さも知ることとなる。また試作依頼で生産者の方々のところにおじゃまし、生産技術、アイデア等、日々教わっているところである。

その他、育種品目としては、キリンビール社と共同開発したカリブラコアの「イルミネーション」シリーズ、耐寒性の強いマーガレット咲きのカレンジュラ「ファッション」シリーズ、花壇用ニュータイプのナデシコ、切り花では極早生でボリュームのあるユーストマ「ジュリエット」シリーズ等を手がけている。

私は花の育種に携わって10数年たつが、上記の作物に加えミニシクラメン、プリムラ、ケイトウ、ダリア等の育成経験がある。はじめはセンスに頼っている部分があったが、ようやく、システムチックな育種ができる入り口にたどり着いたところである。

育種はある目的をもって F₂ 以降固定しやすい選抜が必要になる。いや初めに、より後代で固定しやすい交雑を行なう必要がある。ただしラッキーに予期せぬものが選抜できることもあるにはあるのだが。

育種は釣りにも似て、ある仕掛けをし、目的のものを釣り上げるようなものである。また、たとえが悪いが、相手の出方を見、素材をすばやく取捨選択し、目的をもって手作りをすることから、マージャンにも似ている。交配しているとその遺伝様式が分かった時に飛び上がらんばかりの興奮をおぼえる瞬間もある。

私の場合、メジャー作物でその周辺の野生種を利用して育種を行なうことが多い。ピオラ、ユーストマ、カレンジュラ、ダイアンサスしかりである。植物にはそれほどドマニアックではないので、花葉会幹事長の長岡氏をはじめとして、会員皆様の知識には頭が下がる思いである。

育種に携わっていると奇妙な思いにふける。実際交配していると、この花同士は交配されることを望んでいるのかということである。実はいやがっているものを無理やりくっつけているのではないか。私はあまり奇形を望まない。その植物がもっている最大限のパフォーマンスを引き出すことに興味がある。

これから育種を始める人にとって、最初はあまり難しく考えなくて良いのかもしれない。私も先に述べたようにセンスから入った人間である。プロのブリーダーが思いも付かぬ組み合わせがあるものである。とにかくやってみなければすべては始まらない。後は注意深く観察し、理論の構築をすることである。もちろん書物からも知識が得られる。いつも疑問を持って考え、網を張って読むと、文献はすばやく読め、また新たな実を持った実践的な知識と結びつく。

また今までの経験には無駄なことは無いように思える。すべてがこの年になってさまざまに結びついてきたように思える。実際見てきたもの、人のなにげない一言、これらが、今思い起こせばようやく意味がわかってきた。

実は私は40歳を過ぎてから花の栽培に興味を得た人間である。山登りしながら、自然の植物写真を撮ることには興味があったが、やはり花を作ってみると、ある種、育てることに喜びを感じる。今では、私の庭、部屋の中は、植物であふれている。花を見ていると、不思議に心が躍らされる。自分の作った花なればなおさらである。

今までは、西洋的草花を中心にバタ臭い育種をしてきたが、今後は和花にも挑戦したい。日本人と欧米人が選抜したものはまったく異なる特徴があり面白い。海外向けはもちろん続けていくが、これまでの目標、

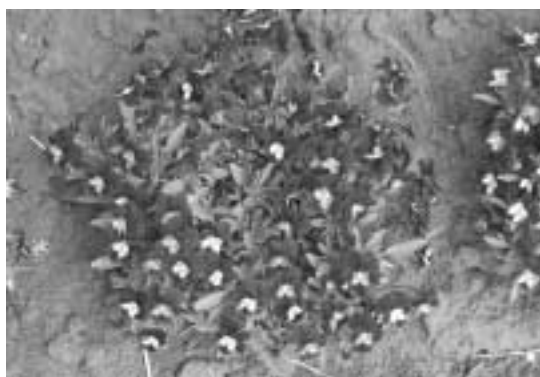
選抜で良いのか、もう一度視点を変えてみたい。そのためには自分の感性をもう少し磨きたい。

私も花の育種の魅力に取り付かれてしまったひとりである。今後どのような作風になるのか楽しみでもある。育種って面白く、かつ魔性を秘めてもいる。

ビオラ F₁ シャングリラ シリーズ



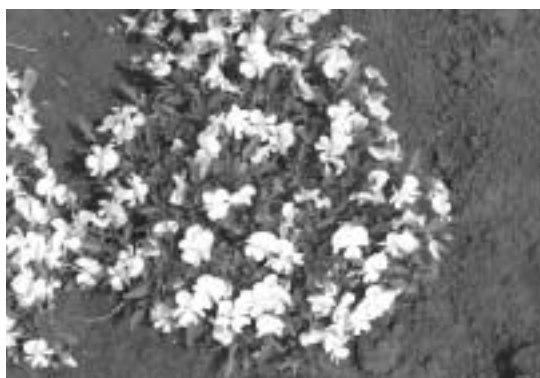
ビオラ F₁ シャングリラ **ローズ**



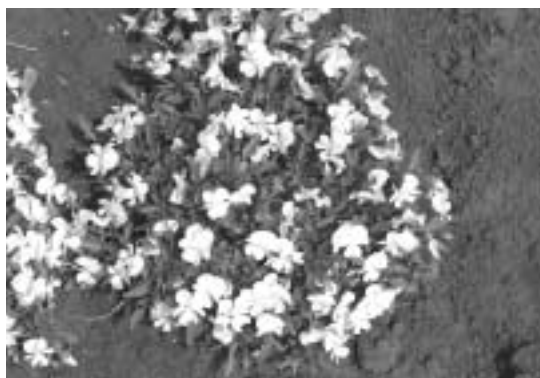
ビオラ F₁ シャングリラ **パープル**



ビオラ F₁ シャングリラ **パープル & イエロー**



ビオラ F₁ シャングリラ **ホワイト**



ビオラ F₁ シャングリラ **ビーコン**

“信頼性”が
私たちの商品です
高度な育苗システムと育
苗技術で、高品質プラグ
苗をお届けいたします。

syngenta

種子から苗まで 幅広く皆様のニーズに お応えいたします。

伝統と革新のトップブランド
豊富な遺伝資源と最新のシード
テクノロジーで、生産性と商品
性を両立させた種苗をご提供
いたします。



シンジェンタ シード株式会社

URL <http://www.syngentaseeds.co.jp>



ダイヤ園芸

本 社

〒289-2304 千葉県香取郡多古町高津原向ノ台401-2
Tel.0479-75-3111 Fax.0479-75-3122

栃木プラグセンター

〒328-0202 栃木県栃木市大久保町230
Tel.0282-31-1298 Fax.0280-31-0386



住化タケダ園芸

鉢花生産者を応援します！ 業務用



【置肥】 緩効性錠剤肥料

エドプロ 錠剤

小粒・10kg入、中粒・10kg入
N:P:K:Mg=12:12:12:1

数種類のチッ素成分が順序よく効き出し、効果が持続します。初期の
溶出がゆっくりですので、肥料焼けや根傷みの心配が少ないです。



【置肥】 有機入り複合肥料

NEW有機エドDX 錠剤 NEW有機エドF 錠剤

(DX1/1) 5kg×2袋入、(DX1/2) 4.7kg×2袋入
N:P:K:Mg=10:10:10:1

(F1/1) 5kg×2袋入、(F1/2) 4.7kg×2袋入
N:P:K:Mg=8:12:10:1

植物に有用な微量成分(ミネラル・核酸・ビタミン・アミノ酸)を含む
有機質を配合。速効性成分と緩効性成分のダブル効果。



【葉面洗浄剤】 葉の汚れを落とし自然なツヤがよみがえる。

リーフクリン10 リーフクリン

(業務用)希釈タイプ 2ℓ入 (業務用)エアゾールタイプ 480ml入

【植物活力剤】 液体肥料 ルートキーパー

チッ素、リン酸、カリに、ビタミン類+鉄イオン+アミノ酸のトリプル
配合の活力剤。10kg入、5kg入

【植物成長調整剤】 ST ボンザイ フロアブル

農林水産省登録第17235号 バクロブトラゾール水和剤
花卉・花木の伸長抑制(矮化)と着蕾数増加に。100ml入(計量容器付)

【殺虫剤】 マイキラール ナメクジ類の退治に

農林水産省登録第16688号 メタアルデヒド水和剤(業務用)2ℓ入
水に薄めて散布。誘引して退治(食毒作用+接触毒作用)。

www.sumika-takeda-engei.co.jp/gyomu/
住化タケダ園芸のホームページ(業務用ページ)



住化タケダ園芸株式会社

花卉緑化

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-1-7
TEL.03(3270)9065(ダイヤルイン)

精興園が育成の新しい切花菊

精興園は菊の育種を続けて70年、常に切花菊の業界をリードしてきました。

伝統的な切花菊だけでなく、菊の消費拡大のために、新しいタイプの品種開発にも力を注いでおり、スプレーギク、マイクロマム、ハイブリッドマム、バイカラーギク等数々の品種を育成発表しております。

今、市場では品種の固定化が進み、変化や個性を求めている消費サイドに対応していません。多様な品種の生産こそが、今、菊の消費拡大にぜひとも必要です。

精興園は、栽培家の皆様にもっとお役に立ちたいと願っております。

 **精興園**

〒729-3111 広島県芦品郡新市町金丸

TEL(0847)53-8211・FAX(0847)57-8455

振替 広島2-60 広島銀行新市支店番64152



快適花生活

「ブリエッタ」の特性そのままに待望のシリーズ化!



バラ咲き+小輪多花

ブリエッタ®
ローズ

この写真は、株幅70~80cmに生長した姿です。



満足の仕上がり

ブリエッタ®
ロイヤル



一株でこのボリューム

ブリエッタ®

 **第一園芸**

<http://www.daiichi-engei.jp/>

第一園芸株式会社

■本社 卸営業セクション
〒140-0012 東京都品川区勝島1-5-21東神ビル
TEL 03-6404-1320 FAX 03-6404-1321

■九州営業所
〒812-0036 福岡市博多区上呉服町10-1博多三井ビル
TEL 092-262-7062 FAX 092-262-7063

■商品開発研究所
〒834-1200 福岡県八女郡立花町北山 126
TEL 0943-22-6804 FAX 0943-22-6806

家庭園芸の知識・技能の普及に35年



イワタバコ

Comandron ramondoides
本州以南の山地の湿った岩壁に生える宿根草。庵近くによくみられるところから古名をタキナ。タキジヤと呼ばれていました。



日本園芸協会

〒151-0061 東京都渋谷区元代々木町14-3 ☎03-3465-5171

■通信教育事業

盆栽技能講座／住まいの庭園技能講座
実用園芸技能講座／総合菊づくり技能講座
植物繁殖技能講座／植物画講座
草木染講座／ハーブコーディネーター養成講座
淡彩花のスケッチ講座／洋らん講座
山野草講座／山菜・きのこ講座

■カルチャースクール(教室)

■出版事業

■友の会(全国に25支部)

■海外研修旅行

指導委員長 桜井 康
S47園卒 斉田安利

高品質時代の施肥管理

元肥(速効+緩効性…長期持続肥料)

実績のあるロングセラー肥料

マグアンプK

22kg

大粒・中粒・細粒

N 6 P 40 K 6 Mg 15



マグアンプKの特性を備えた均一な粒状肥料

マグアンプⅡ

20kg

Lサイズ・Mサイズ・Sサイズ

N 6 P 40 K 6 Mg 15

使用法はマグアンプKに準じます。



有機を配合し、小型ポット・セル成型トレイでの栽培に適した均一な細粒粒状肥料

マグアンプⅢ BB

10kg 有機配合

Sサイズ

N 7 P 23 K 6 Mg 7 B 0.05

花壇苗など短期栽培用の元肥。洋ラン・鉢物への置肥。



錠剤・置肥肥料

プロミック®錠剤 10kg

(鉢物用錠剤置肥)

鉢花、花壇苗、野菜苗、ハーブ、花木類、ポット葉ボタン、大型植物などの生産に幅広く使用できます。一錠の重さが均一のため、施肥の省力化に適しています。



スタンダードタイプ



運動きタイプ

種類	サイズ
スタンダード	12-12-12 大粒・中粒・小粒
	5-10-10 中粒・小粒
	8-12-10 中粒・小粒
運動き	8-8-8 2g・中粒・小粒・ミニ
	6-9-9 中粒・小粒



大粒 2g 中粒 小粒 ミニ
約4.5g 約2.0g 約1.5g 約0.8g 約0.5g
φ20mm φ14mm φ14mm φ10mm φ10mm

液肥(水溶性肥料)



ビータース 10kg

(各種微量要素入高純度粉末液肥)
豊富な品揃えて、生育ステージ、栽培条件、栽培環境に合わせ
てお選びいただけます。

人工培養土



メトロミックス®

350・360・250

約790



レディアース®

レディアース® パーライト

約790

メトロミックス・レディアースは、播種、育苗から出荷まで、袋から出してそのまま利用できる培養土です。

※商品によりパッケージが異なる場合があります。

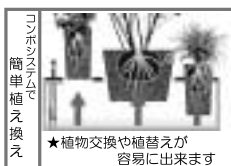


株式会社 ハイポネックス ジャパン (農芸プロダクツチーム)

大阪 〒553-0001 大阪市福島区海老江5-1-1 ☎06-6458-9272 東京 〒156-0052 東京都世田谷区経堂2-6-6 ☎03-3428-7000

プラネットコンポガーデンシステムの特徴

- 発泡煉石（テラトン・ネオコール・スーパーソール）を使ったハイドロカルチャーシステム。
- コンポプランターを並べ内鉢をセットするだけの簡単施工・工期の短縮の実現。
- 多種のコンポプランター及び天板を組み合わせることで、スペースに応じた様々なデザインの演出が可能。
- 内鉢ごとの交換が簡単のため、四季を容易に彩ることができ、また台風時など植物の非難が可能。
- 庭園の移動、レイアウトの変更が可能。
- 底面給水方式で、雨水を貯水でき、水、肥料の無駄を最小限に抑えたシステム。
- 耐根・防水処理の必要が無く軽量。
- メンテナンスが簡単。（水位計による水管理）

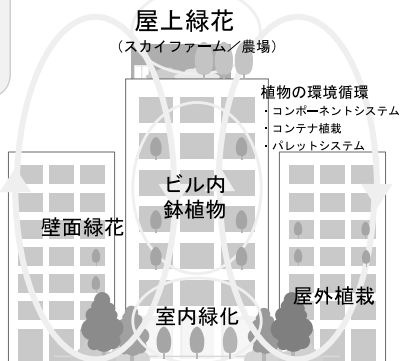


- ★植物交換や植替えが容易に出来ます
- 雨水利用し、水、肥料を最小限に抑えるシステム
- 屋外コンポガーデンの植物が、カセット式に屋内外で容易に交換できる
- 和木、花鉢を定期的に室内外に循環することにより、室内でも季節を感じることができる

Planet Hydroculture system プラネット ハイドロカルチャーシステム

環境循環型ハイドロ緑花システム

■循環イメージ



株式会社プラネット

プラネットハイドロカルチャーシステム

- 本社
- 生産物流センター
- 植栽部
- 名古屋営業所
- 沖縄営業所
- プラネットマーケット
- フロリストプラネット

- 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前6-19-14 神宮前ハッピービル7F
- 〒441-8132 愛知県豊橋市南大清水町字元町61-2
- 〒341-0026 埼玉県三郷市幸房141
- 〒456-0051 愛知県名古屋市中区熱田区四番1丁目16-16 ハットビル
- 〒901-2225 沖縄県宜野湾市大謝名1-12-2
- 〒443-0014 愛知県蒲郡市海陽町2-2 ラグーナ蒲郡内
- 〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田3-3-20-B06 明治安田生命大阪梅田ビル

昭53別 金子 功 昭54別 大林修一

- TEL 03-5469-0590 FAX 03-5469-0591
- TEL 0532-25-8677 FAX 0532-25-5662
- TEL 048-952-8976 FAX 048-952-6477
- TEL 052-682-4410 FAX 052-682-4410
- TEL 098-942-8489 FAX 098-942-8499
- TEL 0533-58-2580 FAX 0533-58-2581
- TEL 06-4795-8090 FAX 06-4795-8091

URL : <http://www.g-planet.com/> E-mail : post@g-planet.com

メネデルファミリーでしっかり、育てます。

2ステップ・システムが、決め手です。

新たに植え込んだ時や、衰弱してきた時は、まず植物の活力を高めることが最優先。

新しい土に慣れたり、元気が回復してきたら、すかさず養分補給を。

植物のコンディションに合わせてメネデル・ファミリーを使い分けましょう。

STEP 1 メネデルで力をつける

有効成分の二価鉄イオンがおだやかに作用して素早く根付かせ、元気の回復を助けます。



- さし木、株分け、植え替え
- 花壇苗・野菜苗の植え付け
- 果樹・花木・庭木の植え付け
- 種まき、球根の植え付け
- 弱った草花・庭木等の回復
- 切り花の水あげと日持ち延長
- ハイドロカルチャーやアクアリウム

メネデル
植物活力素

STEP 2 活力液肥で育てる

チッソ、リン酸、カリの三要素に加え、鉄をはじめとした各種微量要素の働きで、活力をつけながら丈夫な植物を育てます。



メネデル
活力液肥
原液
チッソ リン酸 カリ
5:12:6
全植物用

リン酸・カリ
強化

メネデル株式会社 メネデルのホームページアドレス <http://www.menedael.co.jp>

〒530-0004 大阪市北区堂島浜1-2-6 新ダイヤビル TEL 06(6344)8541 FAX 06(6344)8591 商品のお問い合わせ、詳しい資料のご請求は ☎0120-68-8739

花卉卸売業の後継者として

丸石園芸株式会社 企画室

石 田 裕 一

はじめに

私は平成10年3月に園芸別科花卉専攻を卒業。家庭園芸農薬の薬品メーカーに約5年、営業マンとして勤務しておりました。その後、平成16年4月に丸石園芸株式会社に入社しました。当社では企画室部署で、広範囲にあらゆる仕事に取り組んでおります。

当社は園芸植物・園芸資材の総合卸問屋です。昭和37年創立。現代表取締役 石田裕美が現本社所在地の大阪府大東市で観葉植物の生産・卸を開始し、昭和46年に園芸資材卸部門を併設し、昭和63年に株式会社を設立しました。園芸資材部門は豊中市に営業所を設け、園芸植物部門では鶴見花き卸売市場内に仲卸として鶴見営業所を併設しております。従業員数は48名（平成17年4月1日現在）です。

主な販売先は、園芸店、生花店、ガーデンセンター、ホームセンター、ドラッグストア、スーパーマーケット、諸官庁です（順不同）。資材部の主要な取扱商品は、農薬・肥料・用土・容器・支柱鋼管関連、その他園芸資材全般を取り扱っております。資材部の年間総出荷数量は約1,000万個以上に及び、常時在庫量は約6,000SKUの管理をしております。

花卉部での主要な取扱品目は、花苗・野菜苗・鉢花・観葉植物・ラン・多肉植物・サボテン・庭木、その他植物全般を販売しております。花卉部での平均年間出荷個数は約200万個です。主な展開地域は大阪

府・奈良県・兵庫県・京都府・和歌山県・その他と、関西圏に主力をおいております。

資材卸問屋の現状

近年の価格競争の激しい資材問屋業では、値段的叩き合いにより自主廃業及び倒産になるケースが年々増加傾向になっておりました。関西圏でもここ数年で資材卸問屋が数件以上、自主廃業及び倒産しております。

いわゆる中間業者（問屋）の必要性が問われ、生き残りをかけようと思えば何処よりも安い見積りでアピールするしか、存在を示すことが出来ないのがここ数年の現状です。このような状況のなかで、中間業者に残る利益は薄利です。となると、利益の捻出からみて到底合わない経費の出費が重なってくるため、自主廃業及び倒産に追いやられる訳です。そのため、中間業者をとばしたメーカーとの直接取引が、ここ数年の流れとなっています。

中間業者がなく、メーカーと小売店だけの商売に何の利益があるか考えてみると、中間マージンを抜いた利益しかありません。そのため、更に販売価格の下落が激化します。このような状態になると、店側も儲けがない商品は辞めてしまい、結局は売れている商品でも潰してしまうことになるのです。また、偏った商品構成になり、品揃えも悪くなってしまいます。我々問屋があらゆるコストの削減で、価格だけの勝負に参入した結果がこの状態を招いた訳です。



花卉部温室外観風景



花卉部温室内風景

園芸知識の向上への取り組み

当社では、20年前から、「園芸の専門家としての更なるレベルアップ」をテーマに、園芸業界に携る全てのメーカーから小売店まで、また我々卸問屋の知識の向上を図るため、丸石会を設立しました。

丸石会は当社の取引先小売店からメーカーの皆さんで構成されている団体です。20年前にさかのぼると、陳列すれば何でも売れていた時代でした。しかし経済状況も変動し、環境も変わり、現在では綿密な仕掛け及び販売戦略など、しっかりした企画を立ててこそ、販売及び実績につながっていくのではないのでしょうか。

丸石会では、年に1度の総会及び1泊研修旅行と、3回にわたる勉強会を毎年行っております。勉強会では販売員の接客から、園芸知識のレベルアップ、及び店舗のレイアウトやPOPの書き方などまで、多方面にわたる勉強を行っております。1泊研修旅行では、植物の生産者や資材メーカーの工場から小売店まで、さまざまな所へ見学に行きます。この20年で都道府県17カ所以上と海外研修を1回行なってきました。

現地での生産者との交流や実際に仕入れている植物や資材などの生産現場を見学することで、今まで以上に商品の特性がよく解り、また疑問も実際に目で見てその場で解決することが出来ます。

他業種と比べると、園芸は専門的な知識が必要な業界ですから、専門家としての知識をもつのは義務だと思います。また、園芸に興味をもったお客様に失敗しない栽培方法を提案出来るように、小売店及びメーカー、我々卸問屋がもっと知識を深めることが必要であり、園芸業界の発展及び園芸消費者人口の増加に繋がると確信しております。興味をもって園芸を始められるお客様に「難しい」、または「失敗したからもう園芸はやらない」と拒絶反応を起こさせないためにも、我々が知識を深めることが重要であると考えております。

インドアグリーンへの提案

「園芸」というとどうしても外での作業イメージが強く、若い世代の消費者はあまり受け入れ難いのが現状であります。ところがその中で、最近はインドアグリーンが若い世代に受けています。オフィスの机にミニ観葉を置き、癒しの効果として使用される場面が増えてきています。特に最近の雑貨店等では、ミニ観葉・多肉植物・サボテンなど、インドアとして楽しめる商品、または、インテリアの一部として、オブジェに使用される商品の取り扱いが増えてきています。

当社も新規園芸ユーザーの開発として、若い世代に受け入れていただく商品を提案するために、インドア向けの多肉植物やミニ観葉などの鉢植えを生産しております。当社の資材ルートの活用と植物ルートの活用により実現出来た商品です。器にも趣味嗜好がとて出やすいので、資材部がまずリサーチ及びマーケティングをして器を提案し、その器に合う植物を花卉部が選考して出来上がります。今後はお客様の希望に沿う商品を打合せして、商品製作から共に出来るようなスタイルにしたいと考えております。つまり小売店のオリジナル商品の作成を当社で引き受けるといったシステムです。小売店それぞれには様々な特色があり、また多様なユーザーがいらっしゃいますので、そのお客様の声にお応えし、満足して頂ける商品をご提供できればと思っております。この細かな対応は、問屋だからこそ出来ることだと思います。

植物のオリジナル商品化へのチャレンジ

当社が取り扱う植物のほとんどは、市場からの仕入です。しかし近年求められているのは、オリジナル商品の取り扱いです。市場商品だけの品揃えでは何処で仕入れても同じであるため、小売店に魅力を感じてもらえないのが正直なところです。



花卉部商品荷卸作業風景

当社としては数年後の生き残りもかけ、オリジナル商品の取り扱いも視野に入れて行こうと考えております。ただ既に取組まれている同業者の方もいらっしゃいますので、現状ではまだ商品化されていない品目にチャレンジしたいと考えております。

植物の取り扱いについては長年のノウハウもありますし、小売店と直に取り引きしている立場の我々ですので、今本当に求められている商品を把握して、商品に結びつけたいと考えています。またオリジナル商品を取り扱うことにより、地域色の強い植物を揃え、地域に適した風土及び気候などの条件を考慮した、地域に密着したサービスを提供して、より一層の細かなご提案が出来るのではないかと思います。

今後の展望

当社では知識力・企画力・情報力、この3点をバランスよく持ち合わせた問屋業を心掛けております。

知識力向上について。問屋業は小売店またはメーカーと違い、取り扱いアイテムは膨大な数です。この膨大なアイテムを上手に取り扱うためには、商品知識については小売店よりも、またメーカーよりも深く知っておかなければなりません。当社では商品知識向上の一貫として、営業の勉強会を頻繁に行っております。

これはもちろん、セールス研修ではありません。商品をお得意先様にご紹介するには、曖昧な商品知識では商品をご提供、販売して頂いているメーカーや小売店に申し訳がありません。従来小売店が商品知識を高めなければならないといわれてきましたが、我々問屋業こそ、メーカーの商品を取り扱い、また紹介する立場にあるのですから、一番商品知識がなくては行けないのではないかと感じています。ですから、商品勉強会を頻繁に行うようにしております。

企画力の向上について。営業社員全員が商品知識を高めることにより、商品の特性を熟知した売場の商品構成及びご提案が出来ると思います。特にシーズン色の強い園芸では、シーズン毎のタイムリーな提案が重



資材部倉庫外観風景

要視されます。どうすればタイムリーに商品をご提案出来るか、それは商品特性を熟知するほかに何も無いと思います。

情報力について。当社では資材部と花卉部の2部に分けられております。他の同業者には両方を兼ね備えたベンダーがありません。この植物と資材の情報力を上手くコントロールして情報をご提供出来るようになります。植物があって初めて園芸資材の販売に繋がりますので、植物と資材を連携させた情報交換は非常に重要だと思います。

以上の3点に共通することは、やはり「知識」が一番大きなポイントだと思います。今後の展開として、知識の向上は元より、商品の取り扱いにしても、ただ単に新商品を扱うのではなく、全ての商品の特性を知った上で、個々の小売店にご提案出来るようなスタイルを確立したいと考えております。小売店にとっても、全ての新商品や商品を紹介されても選びようがないと思いますし、個々の小売店の特色に合わせて厳選された商品の内容について細かく説明されたほうが、商品自体の内容及び必要性を感じて頂けると思います。

私の抱負は、「園芸を通じて、地域や町を、より緑豊かにしたい」と思っています。自分自身がこの心やすらぐ園芸に関わっている人間であることに責任をもち、緑の普及に貢献したいと考えています。

ここまで、私の考えだけを勝手ながらも述べさせていただきました。日々問屋業のあり方について悩んでいるのが正直なところですが、私の考え方には間違っている点や賛同していただけない部分が多いかと思いますが、是非この機会に、いろいろなご意見、ご感想をお聞かせ願いたいと強く思っております。E-mail (info@maruishiengi.jp) でも電話 (072-871-3990) でも、お近くにお寄りになられた時でも構いません。いろいろなご意見、ご指摘を宜しくお願い申し上げます。まだまだ未熟者ですので、ご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

岐阜県における「花の都ぎふ」運動とバラ

岐阜県立国際園芸アカデミー

上 田 善 弘

中部国際空港の開港、愛・地球博の開催と、本年の中部圏は話題に事欠くことなく、元気で活気にあふれていた。それに合わせ、岐阜県も数多くの観光客が訪れた。130年以上の歴史がある、長良川鶴飼には1997年以来の客があったという。しかし、すでに、愛・地球博後のことが危惧されかけている。というのも、名古屋は経済的に活気があってもそれに近い岐阜は、名古屋のベッドタウンという位置柄、取り残されたかの感がある。

それでも、花に関しては、県内可児市にある花フェスタ記念公園で大きなイベントが開催され、3月1日から9月中旬までの会期で、予想を上回る142万人の人が公園を訪れた。

この岐阜で、長年勤務した千葉大学を退職し、本年春に開校したばかりの岐阜県立国際園芸アカデミーに

勤務することになった。また、花フェスタ記念公園には設立された直後から関わっている。ここでは、これらの2施設と、これまで岐阜県で進められてきた花の振興についてふれる。

「花の都ぎふ」運動

この運動は、全国知事会会長として、国に積極的に発言し、この2月で岐阜県知事を辞められた梶原拓氏が進めてこられたものである。梶原氏は十数年前に知事に就任するとともに、本運動を始動された。

ちょうど15年前、大阪で国際花と緑の博覧会が開催されていた年に、県民に「夢起こし県政」推進のための「夢」が募集された。その結果最も多かった提案が、「人と自然の共生」に関するものであった。これはまさに、大阪花博の理念であり、それを継承するかのよ



花フェスタ記念公園の新しいバラ園を眺望する。片屋根の建物は花のミュージアム（2005年3月撮影）

うに「花の都ぎふ」運動は平成2年にスタートした。

この運動では、「花」をキーワードにし、「花かざり」「花づくり」「人づくり」を運動の3本柱とし、花を通じた地域活性化を進めて「日本一住みよいふるさとぎふ」の実現を目指している。運動の3本柱は、美しいふるさとづくり、潤いのある暮らし・豊かな心、花の産業振興を図ることにある。花の十徳が定められ、あらゆる花の効能が挙げられている。

例えば、心が豊かに（心の時代）、自然を守る心は花から、香り高い文化の創造、情操教育、生活を華やかに、老化の予防、花は文化産業（農林業の振興）など、各地で取り上げられている、花のキャッチフレーズはほとんどこの中に含まれるのではないだろうか。

具体的な活動としては、県内の街道や地域を花で飾ること（花木の植栽、道ばたの花壇など）、新品種開発（GIFUブランド）による花き産業振興、園芸福祉活動、日本的な花飾りとしての岐阜県独自の寄せ植え華道の普及、ヨーロッパで盛んなオープンガーデンの振興（オープンガーデン協会の設立）などがある。

実に、この間（平成2年から平成15年）に花の出荷額は、58億円から98億円に増加した。また、園芸福祉活動においては、現在、医療・福祉施設での園芸療法等の支援活動を行う登録された園芸福祉サポーターは185名となり、県内において活発に活動している。そして、これらの一連の花の都運動を象徴するものが、花フェスタ記念公園であり、運動の3本柱としての「人づくり」の中心を担っているのが、私が勤務する岐阜県立国際園芸アカデミーである。

花フェスタ記念公園

本公園は、平成7年に「Life with flowers」一四季が彩る花かざり見本園一をテーマに開催された、花フェスタ'95ぎふの開催とともに整備された公園である。開催イベントには異例の約200万人が訪れたということで話題になった。

岐阜県はバラ苗の生産日本一の県で、切り花バラの生産も盛んなことから、本公園はバラを目玉とし、日本一、東洋一のバラ園をもつ公園として名を馳せていた。イベント開催後、毎年整備され、本年で10年となる。本年は10年の節目として、ちょうど愛・地球博が開催されるということもあり、それに合わせ、大々的に整備が行われた。



バラ園内のテーマガーデンの一つ、ジョセフィーヌのバラ園

整備の主たるものは、バラ園を世界一のものにするということである。従来、世界一（ここでいう世界一はバラのコレクション数が世界一）のバラ園は、旧東ドイツ内、サンゲルハウゼンにあり、そのコレクション数は6,800種類。世界一になるためには、バラのコレクション数が、サンゲルハウゼンを越えなければならないということで進めてこられたのである。

昨年まで公開されていたバラのコレクション数は、約2,000種類ばかり、それがいきなり6,800種類を越えるのである。誰もが耳を疑ったのは当然である。約80haの公園の中で、従来のバラ園は2.5ha、今回新設されたバラ園が5ha、バラ園だけで7.5haとなる。

新設されたバラ園は、巨大な花のミュージアムを核とし、それぞれがテーマをもつ、14のテーマガーデンからなる。ミュージアムとバラ園はそれぞれ新進気鋭の若き建築家と造園家により設計され、彼らの独自の主張が込められたものとなっている。

花のミュージアムは片屋根形の建造物であり、傾斜のある屋根面は全面、イヌツゲとローズマリーで屋上緑化がなされ、側面は、自然光を取り入れるようガラス面とし、しかも紫外線から内部の展示物を保護するようにイペ材を用いた遮光が工夫されている。建物内は、バラの歴史、香り、花色の3展示コーナーと映像ホール、図書室を中心とする情報室、カルチャー教室などからなる。屋外のバラ園は、県産材により作られた回廊から見渡せるようになっていて、回廊の壁面は当然のようにツルバラにより覆われている。

これだけのテーマをもったバラ園は、私自身、海外のどこでも見たことがなく、名実ともに世界一であることは間違いない。

花フェスタ記念公園では、1998年より、世界中から

バラの新品種を集め、バラの国際コンテストが開催されている。従来の日本バラ会が神代植物園で開催しているコンテストとは異なり、日本の気候に適した、耐病害虫性に優れた（ロウメインテナンス）、一般に普及でき、修景用に使えるバラを選ぶことを主たる目的としている。春2回、秋1回、計3回の審査、さらには現場の管理者による経時的な病虫害被害状況や開花数調査を加味して採点される。このような厳密な審査は世界的にも例がなく、本コンテストは非常にレベルの高いものとなっている。ちなみに私は、コンテスト開催当初より審査委員長を務めている。

このようなバラ園を擁すること、世界的に高いレベルのコンテストを主催していることから、2003年には、世界バラ会連合より、本公園は優秀ガーデン賞を授与されている。

世界バラ育種会議

今春のイベントに合わせ、花フェスタ記念公園と岐阜市内長良川国際会議場で、世界5ヶ国7名の著名なバラ育種家を招き、世界バラ育種家会議が開催された。

このような会議を花フェスタ記念公園で開催することは、数年前、第一回の国際バラコンテストの表彰式の際に、ニュージーランドから有名なバラ育種家、マグレディ氏が招かれ、梶原知事とともに開催された会合から始まっている。この会合で、マグレディ氏が中心になって、本公園で、世界中のバラ育種家が一同に集う会議を開催したい旨の提案が、知事からなされた。この提案が今春、実現したのである。会議を予定し、バラ園内には「世界のバラ育種家コーナー」が設けられており、各育種会社でこれまで育成されてきた主な品種を見ることができる。

長良川国際会議場ではバラの生産者を中心としたバラの専門家を対象に、花フェスタ記念公園では一般の公園入場者を対象に、会議が開催された。そこでは、各社のバラの育種方針、各育種家のバラへの想いが語られた。現在、世界のバラ育種家が取り組み、目指している共通目標は、耐病害虫性と香りのバラ育種であることが、明確にされた。

また、花フェスタ記念公園での会議の前には、国際ローズコンテストを開催している環太平洋の国々（アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、日本）がバラの友好提携をし、交流を図ることを目的に各国代表間で友好協定調印式が行われた。

これらの世界各国のバラ育種家と代表者が集った一連の行事は、このバラ園が岐阜だけのものではなく、世界の遺産であることを岐阜県の関係者に認識していただくよい機会にもなった。さらに、これだけの短期間に世界有数のバラ園ができたことに対し、世界バラ会連合トミー・ケアンズ会長から梶原前知事に、その功績に対し感謝をこめて、会からゴールドメダルが授与された。

花フェスタ記念公園は、設立以来、総計250億円もの巨額の資金が注ぎ込まれており、今後如何にあるべきか、最近の指定管理制度にもらみ議論されている。

国際園芸アカデミー

「花の都ぎふ」運動の3本柱の一つ「人づくり」としての、国際園芸アカデミーの創立は、梶原県政の最後の念願であった。

本校は「花と緑の空間づくりによる健康でこころ豊かな生活の創造」の実現を目指し、平成16年に開校された専修学校であり、花フェスタ記念公園と同じ市内にある。

従来の専門分野の細分化が進んだ高等教育機関とは異なり、花と緑を総合的に捉えられる人材の育成に主眼がおかれている。具体的には、花と緑化木の生産から販売、装飾やデザイン、緑化、景観づくり、さらには園芸福祉・療法まで学べるようになっている。

学科は、短大卒業以上の学生を受け入れる4年課程の上級マイスター科（各学年10名定員）と高卒以上の学生を対象とした2年課程のマイスター科（各学年20名定員）からなる。

上級マイスター科は、生産（生産、流通）、装飾（装飾、造園・緑化）および環境（環境・景観、癒し・利用）の3コースからなり、1年目はすべての分



国際園芸アカデミーの本館



国際園芸アカデミーの実習棟と温室。手前の庭は園芸療法実習園

野を学び、2年生以降に各コースへの専門に分かれる。

カリキュラムでは、座学1に対し、実習3と、実習を主に授業が組まれている。3、4年次には、インターンシップ（職場派遣）により、実際の企業、生産者へ派遣され、現場の技術習得、実践力の養成が図られる。前述の花フェスタ記念公園も学生の実習の場である。海外研修も必須となっており、本年、初めてオランダ、フランスの園芸視察、および園芸学校での研修が行われた。

この4月に就任してから半年ほど経つが、各授業で講義する学生は上級マイスター科で約10人、マイスター科で約20人。これが各コース・分野に入ると、3、4名前後、じつに少数濃密指導である。

各コースとも学生の机は、教室室と同じ広い空間の中にあり、常に学生と教官のコミュニケーションがとれるようになっている。学生は気軽に授業のこと、将来のこと、何でも相談できる環境にある。平成19年4月には専任教官がすべて補充され、各コース3名教官の指導体制となる。

私自身は、これらのどのコースにも所属せず、共通分野に属し、園芸文化を担当している。他に共通分野として経営分野の教官が1名、計11名のスタッフが教鞭をとることになる。

これらの専任教官以外に、マイスター科の専任教官として、専任指導員が7名、指導課長は前花担当専門

技術員である。当校は海外研修もあることから、海外駐在経験をもつ優秀な3名の県職員も配属されている。これだけのスタッフをそろえた、花き園芸と造園分野に特化した教育機関は当校の他にないと思っている。

また、当校のある敷地内には、県その他機関である農業大学校、小、中、高の教員の農業、園芸研修を行うグリーンテクノ研修室もあり、緑に囲まれたたいへん恵まれた環境にある。

校舎は県産の木材を使った木造構造で、壁面はハンギングバスケットとコンテナ植栽により緑化されており、屋上には屋上緑化スペースもある。これらの緑花はすべて、学生の実習により行われ、シーズンにより入れ替えられる。

上記、人材育成部門の他に一般の方を対象にした生涯学習部門があり、花、樹木の栽培・管理からアロマセラピー、園芸福祉、造園設計、マーケティングまでの幅広い講座も担当し、年間の延べ受講者数は約2,000名となる。

以上、「花の都」運動とそれにより整備されてきた施設、活動を紹介させていただいた。これらの運動、施策は、すべて梶原前知事のリーダーシップのもとに行われてきたことであり、今更ながら、彼の存在を実感するばかりである。

「園芸」をテーマとした絵本を探す

山 田 幸 子

子どもに「園芸」の楽しさを知ってもらいたい。それには、親が実際に園芸を楽しんでいる姿を見せること。子どもが植物に触れ、植物を育てることのできる環境（機会）を作ること。そしておとなが子どもと一緒に園芸を楽しむこと。これがそのためのプロセスであることは、いうまでもない。だがその上で、植物に興味を持ち、植物を育てるおもしろさを知るきっかけとして、“絵本”が大きな役割を担ってくれるのではないだろうか。

さてそれでは、この役割を担ってくれる“絵本”はどのくらいあるのだろうか。子どもたちを「園芸」の世界に引きずり込むような、素敵な絵本は実際にあるだろうか。これは次世代園芸愛好家人口拡大のために、早急に調査・活用の方策を立てねばならない課題である。まず調査を開始した。

絵本を収集・選択

現在入手できる日本語の絵本を対象とした。書店の絵本コーナー、絵本専門書店、インターネットなどで、タイトルに植物名、花、木、タネ、葉、畑、森、庭などの言葉を含む本を中心に収集。約100冊になった。これを本の記載に準じて、対象年齢別に分類。その中から、まず“私自身が楽しめる絵本”を選択した。

とくに幼児の絵本は「読み聞かせ」を前提としたものであり、子どもは「絵」を見ながら、「文」を聞き、次の画面を想像する。そしてページをめくる。新たな「絵」を見て感動し、「文」を聞く。子どもはドキドキ、ハラハラさせられるもの、登場人物と共感できるものを喜ぶ。したがって、絵本とはおとなと子どものコミュニケーションの方法のひとつであり、子どもと楽しい時を過ごそうと、おとなが読んであげたくなる本である。そのためにはまずおとなの私自身が楽しめる本であることが重要であると、認識するからである。

なお、「園芸」をテーマとする絵本とは、本の中にタネをまく、苗を植える、水やりをする、収穫するなど、「育てる」行為のあるものと定義した。

収集した絵本の中には、植物そのものの姿、生長のようす、四季の変化などを捉えた内容で、植物に「親しむ」をテーマとする素晴らしい絵本もあるので、取り上げてみたい。植物と遊び、親しむことから、園芸に興味が広がる可能性が強いと思われるからである。

子どもに読んでやりたい本 子どもが読んでほしい本

○2～3歳から

赤ちゃんが絵本に興味を示すのは満1歳頃から。書店、公立の図書館等では「初めて出会う本」「おひぎで読む本」などのネーミングでコーナーを設け、本の数、内容等も充実している。そして2～3歳になると、言葉に対する力が発達し、簡単な筋を追って物語を理解することができるようになるといわれている。

1『おひやくしょうのやん』（ディック・ブルーナ／文・絵 松岡享子／訳 福音館書店1984初版発行；以下同 オランダ1984原本発行；以下同）「初めて出会う絵本」の作者として知られ、多数の本があるが、植物が出てくる本はこれだけ。畑に花のタネをまき、タネを食べに来る小鳥を追いか、きれいな青い花が咲かせる。

2『ぼくのはたけ』（ビジョー・ル・トール／作・絵 掛川恭子／訳 カワイ出版1994 アメリカ1984）ウサギの畑仕事。タネをまき、育てて収穫し、秋になったらおしまい。単純化された鉛筆画がユニーク。

3『うえきやのくまさん』（フィービとジョーン・ウォーントン／作・絵 まさきりこ／訳 福音館書店1987 イギリス1983）ある一日。午前中は隣の庭の手入れ、午後は畑で収穫した野菜や花を販売する。

絵本の世界では、動物が擬人化され、立って歩き、話をするのは当然のこと。子どもは違和感なく受け入れ、かえって親しみがわくようである。

4『いちご』（平山和子／作 福音館書店1989）畑のイチゴの冬の姿から、春を待ち、花が咲き、実がなるまでを追う。待つことの大切さを丹念に描いている。「いただきます」で終わるが、イチゴがおいしそう！



2～3歳からの絵本

「はたけでそだっただいこん。やおやさんにならびました」で始まる 5『やさい』(同1982)とともに、食べるものから植物に興味を導くのも効果があるようだ。

6『りんごの木』(エドアルド・ベチシカ/文 ヘレナ・ズマトリーコバー/絵 うちだりさこ/訳 福音館書店1972 チェコ1954) 小さなりんごの木が秋に赤い実をつけるまで、小さな男の子は不思議をいくつも発見する。43刷と長く支持されている絵本。

7『ぴよちゃんとひまわり』(いりやまさとし/作・絵 学習研究社2004) ひよこのぴよちゃんが見つけた1粒のタネ。葉をふやして食べるつもりで育てたヒマワリと仲良しになる。

8『くりちゃんとひまわりのたね』(どいかや/作 ポプラ社2004) ハムスターのくりちゃん。大好物のひまわりのタネをふやすために3粒タネをまく。大きく育てて花を咲かせ、友達と一緒に収穫してパーティー。

9『14ひきのかぼちゃ』(いわむらかずお/作 童心社1997) 14匹のねずみの家族。おじいさんが持っていた南瓜のタネをまく。芽が出るまでのハラハラ、ドキドキ。花が咲き、小さな実を見つけたときの感動も共感。収穫して、かぼちゃの料理がたくさん並ぶ食卓もうれしい。「14ひき」はシリーズ化されているが、どれも自然の情景がていねいに描かれていて楽しい。

10『ぐりとぐらとすみれちゃん』(中川李枝子/文 山脇百合子/絵 福音館書店2003) のねずみのぐりとぐらは朝起きるとすぐに畑仕事。すみれちゃんが大きなかぼちゃを持ってやって来る。森の動物と一緒にかぼちゃの料理。たくさん食べて、タネは庭の畑にまく。

さて、小さな子に人気のある花はチューリップのようである。

11『でてこいちゅーりっぷ』(いもとようこ/作・絵 金の星社1982) 「こねこちゃんえほん」シリーズの1冊で、34刷の人気絵本。球根を植え、なかよしのうさぎとねずみといっしょに水をやる。でもやりすぎでもぐら一家が引越するほど。

12『チューリップのにわ』(芭蕉みどり/作・絵 ポプ

ラ社1992) のねずみの子のティモシーとサラは球根を買いにでかける。絵がきれいで女の子が喜びそう。「ティモシーとサラの絵本」シリーズの1冊で、31刷。同シリーズ 13『はながさくころに』(同2004) もある。

この年齢向きには、ほかに 14『くんちゃんのはたけしごと』(ドロシー・マリノ/作 間崎ルリ子/訳 ペンギン社1983)、15『もーいいかい まあだだよ』(平出衛/作 福音館書店2001)、16『くまのこミンのおはなばたけ』(あいはらひろゆき/文 あだちなみ/絵 ソニーマガジン2005) も楽しい。

○4～5歳から

17『おじいちゃんのはたけ』(ジャンヌ・ブペール/作 富山房編集部/文 富山房1993) 絵を丹念に見て楽しみたい本である。見開きのページはすべて同じ畑。季節の移り変わりにつれて様々な畑仕事があり、いろいろな野菜が育っていくのを細かく描いている。描写が面白く、土の中のジャガイモやニンジンまで描いているが、子どもにも分かりやすいだろう。

さて、ありっこないけど子どもがおもしろがる「ナセンス絵本」といわれるジャンルにも、「園芸」をテーマにしたものがある。

18『すいかのたね』(さとうわきこ/作・絵 福音館書店1987) ばばあちゃんはスイカのタネを庭に植えた。こねこがほじくりかえす。「なんだつまらない」と埋める。犬も、狐も、ばばあちゃんもほじくりかえす。怒ったすいかのタネがいきおいよくつるを伸ばして大きなスイカの実をつけた。「これでもつまらないか!」。ばばあちゃんは子どもたちの人気者である。

19『そらいろのたね』(中川李枝子/文 大村百合子/絵 福音館書店1967) ゆうじは飛行機をキツネの空色のタネととりかえっこ。庭に植えると、翌朝出てきた芽は空色の小さな家だった。水をやると大きくなる。友達も動物もみんなが入れるくらいにどんどん大きくなる。25年以上、80刷の人気絵本である。



4～5歳からの絵本

20『みどりいろのたね』(たかどのほうこ／著 太田大八／画 福音館書店1988) 畑に緑色のタネをまく。まあちゃんは緑色のあめもいっしょに。メロンあめをなめて生長したタネは、メロン味の実をつけたとさ。

〈科学の本〉

「科学の本」「知識の本」は4歳ごろから。この年齢には知識を与えるより、子どもの好奇心や興味をどれだけかきたてるか。おもしろい、楽しいが重要なようである。この中に「園芸」や「植物に親しむ」をテーマとした本がある。

21『ピーナッツ なんきんまめ らっかせい』(こうやすすむ／文 なかしまむつこ／絵 福音館書店1987) 22『だいち えだまめ まめもやし』(同1992) は、どちらも食べるものを栽培することで子どもの興味を引き出している。23『マーヤのやさいばたけ』(レーナ・アンダション／作 山内清子／訳 富山房1996 スウェーデン1987) も同様である。

24『やさいばたけははなばたけ』(広野多珂子／作・絵 佼成出版社2004) おばあちゃんの畑でコマツナや大根など、野菜にも花が咲くのを知ってびっくり。トマトやキュウリは花が咲いて実がなることも知る。

25『ポットくんのおしり』(真木文絵／文 石倉ヒロユキ／絵 福音館書店1998) ポットくんのおしりにはなぜ穴が開いているのか。庭の隅に忘れられていたヒヤシンスの球根を試行錯誤しながら植える。

26『あかいはっぱ きいろいはっぱ』(ロイス・エイラト／作 阿部日奈子／訳 福音館書店2002 アメリカ1991) サトウカエデの木を庭に植えた子どもの話。仲良しになった木の四季の変化を描く。大きな赤や黄の葉が印象的。

27『ちいさいタネ』(エリック・カール／作 ゆあさふみえ／訳 偕成社1990 アメリカ1970) 花のタネが風に乗って遠くへ運ばれる。春、小さなタネが芽を出し、小さな草となり、やがて大きな花を咲かせる。大胆な構図と色彩が子どもを惹きつけるだろう。

28『もりのえほん』(安野光雅 福音館書店1981)

文字のない絵本。子どもと、木々の間に隠れているリスやクマ、キリンなどを探するのがおもしろい。29『はるにれ』(姉崎一馬／写真 福音館書店1981) は、北海道の原野に立つハルニレの姿を追う文字のない写真絵本。こんな本から自然に親しむのも一興である。

30『じめんのうえとじめんのした』(アーマE. ウェーパー／文・絵 藤枝滯子／訳 福音館書店1968 アメリカ1943) 「緑色の植物には、地面の上に出ているところと

地面の下にもぐっているところがあって、地面の上と下の両方に伸びています」。オレンジと白でページを2分。明快な絵が分かりやすい。

図鑑的な本では、31『はながさいたら』(菅原久夫／文 石部虎二／絵 福音館書店1984)、32『たねがとぶ』(甲斐信枝／作 森田竜義／監修 福音館書店1993) が見ごたえがある。

33『きいちごだより』(岸田衿子／文 古矢一穂／絵 福音館書店2001) 動物たちが自分の村のキイチゴのことを手紙に書く形で様々な種類のキイチゴを紹介。

34『木の本』(萩原信介／文 高森登志夫／絵 福音館書店1986) は木の図鑑。季節ごとの花、芽生え、葉などが克明に描かれている。こんな本を持って、親子で木の観察に行ったら分かりやすい。

35『マザーツリー』(村田真一／文 松岡達英／絵 小学館1995) は白神山地に生えるブナの1年間を、そのまわりの植物や動物とともに克明に描いている。

○小学校低学年から

この年齢になって、ようやく園芸の楽しさをじっくり語る絵本が現れる。

36『ジョディのいんげんまめ』(マラキー・ドイル／文 ジュディス・アリボン／絵 山口文生／訳 評論社2002 イギリス1999) インゲンマメをまく。「どうなるの?」という質問に、「見まもっていればわかるよ」と繰り返すおじいちゃん。日々世話をすること、生長のようすを見守ること、どちらも大切だと教えている。絵も楽しい。マメが生長していくようすがていねいに描かれている。同時に絵の中のお母さんのおなかも大きくなっていき、秋に赤ちゃんが生まれる。身近なおとなに教えてもらいながら子どもが植物の栽培を始める理想的なスタイル。実生活でも実現させたい。

37『はちうえはぼくにまかせて』(ジーン・ジョン／作 マーガレット・B・グレアム／絵 森比佐志／訳 ベンギン社1981 アメリカ1959) トミーは夏休みで出かける近所の家の鉢植えを預かるアルバイト。お父さんはブ



小学校低学年からの絵本

ツブツ。やがて家の中はジャングル状態。いかにもアメリカ的だが、育てる楽しさが伝わってくる。

38『おおきな木がほしい』（佐藤さとる／文 村上勉／絵 偕成社1971）「庭に大きな木があったらいいな。はしごをつけて、上って行くと家があるんだ。またもっと上ると見晴台もある」と、夢は果てしなく広がる。

39『木はいいなあ』（ユードリイ／作 シーモント／絵 西園寺祥子／訳 偕成社1976 アメリカ1956）とともに、木と過ごす楽しさが描かれている。どちらも最後に木を植えて終わっている。

○小学校 中学年から

この年齢になると、植物との付き合い方もさらに発展し、園芸の力（効用）を物語る絵本も出てくる。

40『みどりのゆび』（モーリス・ドリュオン著 岩波文庫1977 フランス1957）緑の指を持つ少年チト。親指で土に穴を開けると芽が出て花が咲く。刑務所やスラム街を花いっぱいにし、兵器にも花を咲かせて戦争を止めさせ、花で人を幸せにする。

41『ルピナスさん』（バーバラ・クーニー／作 掛川恭子／訳 ほるぷ出版1987 アメリカ1982）海を見下ろす小さな家に住んでいるおばあさん。世の中を美しくするために、ルピナスのタネを村中にまく。

42『ぼくの庭ができたよ』（ゲルダ・ミュラー／作 ささきたづこ／訳 文化出版局1989 オランダ1988）広い庭がある家に引っ越してきた家族の庭造りを追う。庭造りの入門書であり、庭の楽しみ方読本でもある。

43『リディアのガーデニング』（サラ・スチュワート／文 ディビッド・スモール／絵 福本友美子／訳 アスラン書房1999 アメリカ1997）アメリカ不況の時代、町のおじさんの家に預けられた少女が店を花いっぱいにしてみんなに喜んでもらう。

44『しあわせなモミの木』（シャーロット・ゾロトウ／文 ルース・ロビンス／絵 みらいなな／訳 童話屋1991 アメリカ1972）枯れかかったモミの木を家の前に

植えたおじいさん。丹精して大きく育てると、小鳥が集まり、子どもたちが集い、憩いの場となる。

45『植物あそび』（ながたはるみ／作 福音館書店1998）タネまきから草花で作るおもちゃまで、植物との遊び方のすべてが載っている。1冊あると便利。

46『やさいをそだてよう』（鳥居ヤス子／作 かわさきようこ／絵 富山房1991）おとなの園芸書を子ども向けにわかりやすくした本。天敵などの話もある。

47『木をかこう』（ブルーノ・ムナリー／作 須賀敦子／訳 至光社1982 イタリア1978）木を描きたくなる絵本。枝の先が2本に分かれる木、3本に分かれる木、それぞれ規則はあるけど、でも横に広がるの、縦に伸びるの、いろいろな形の木になる。

○小学校 高学年から

48『リネアの小さな庭』（クリスティーナ・ビョルク／文 レーナ・アンデション／絵 山梨幹子／訳 世界文化社1994 スウェーデン1978）子ども向きの園芸書の傑作。園芸が好きになったら、読んでほしい。

49『ピーターラビットの庭しごと』（ジョニー・ウォルターズ／文 ローワン・クリフォード／作図 福音館書店1993 イギリス1992）子どもに人気のピーターラビットが案内する、園芸入門書。

50『木を植えた男』（ジャン・ジオノ／原作 フレデリック・バック／絵 寺岡襄／訳 あすなろ書房1989 フランス1983）山奥の荒地で男が一人、カシワやブナ、カバの木を育て続ける。やがて豊かな森となり、人々が移り住み、村が生まれる。

誌面の都合で一部割愛したが、「園芸」や「植物と親しむ」をテーマとした絵本があることは確かである。その数の多少や内容等については人それぞれ、様々な考え方があるだろう。だがまず、絵本を自らが楽しみ、子どもとのコミュニケーションを密にしようとするおとなになることが大切なのかもしれない。このリストを活用していただければ幸いである。



小学校中学年からの絵本



小学校高学年からの絵本

広州・香格里拉・老君山・麗江を訪ねて

山 口 ま り

今回の旅は、植物の宝庫雲南省に青いケシや石楠花・プリムラを見に行こうと計画された。6月26日～7月3日の8日間、19名の参加で、近畿日本ツーリストで催行された。

● 6月26日（日）

いざ中国・広州へ

成田国際空港を定刻の10：00に日本航空で離陸、5時間弱のフライトで広州の新白雲国際空港に到着。時差は-1時間。気温32℃、日本以上の蒸し暑さである。

広州は、年平均温度22℃、最高温度は39℃、最低温度は0℃、雨量1900mm、人口1000万人、中国南部の最大の都市で華南地方の中心地。

14：15、迎いのバスで空港より華南植物園に向かう。中国最大の亜熱帯植物園で315万㎡に8000種を超える植物が栽培され、ヤシ・シュロ類、竹類、ラン類、ソテツ類、シダ類のコレクションが有名という。



華南植物園
中国最大の亜熱帯植物園
のダイオウヤシの並木

16：30に植物園を後にして、午後5：00ホテル着。広東海鮮料理にて「再会パーティー」。さすが、食は、広州にありという言葉通りの美味な中華料理である。

● 6月27日（月）

一大花卉産地の順徳へ

中国一の花卉の生産・流通拠点となっている広州に隣接する順徳へ。

花卉流通センター・陳村花卉世界有限公司を訪ね

る。ここは政府が花卉の発展のために設立した会社で、広告・研修・研究開発・輸出入・博覧会野開催などを行っている。会社の概要を伺った後、周囲にある卸売り会社を訪ねる。

12：30に順徳にて昼食。昼食後、激しい雨の降る中、^{ちんふいえん}廣東省の4つの名園の一つで清暉園へ。

15：30に雷雨の中、順徳生態樂園へ。200万㎡を有し、自然のままの植生を保っている公園で蓮池や沼が点在し、白鷺が舞っていた。

雨のため、早々に引き上げる。夕食は、子豚の丸焼きがメインの本場の広東料理を頂く。

● 6月28日

理想郷の地・香格里拉（シャングリラ）へ

広州7：20発、空路シャングリラに出発。9：50シャングリラ空港に到着。気温13℃、標高約3,300m。一気に高地にきたために2/3の方が軽い高山病を訴える。

10：30雲南省のチベット仏教（ラマ教）最大で第5代ダライ・ラマゆかりの寺院、松贊林寺へ。本堂まで長い階段を登っていく。階段の両側には宿坊が並び、階段脇の釣鐘型のクリーム色の小さなクレマチス（*Clematis rehderiana*）にしばし息苦しさを忘れる。



チベット仏教最大の寺院の松贊林寺

昼食後、両側が深く切れ込み、天然の橋のような地形の天生橋へ向かう。*Incarvillea mairei*の赤紫の大型の花に、雲南の植物との出会いの期待が高まる。

^{いら}依拉草原へ。途中の道路の脇の草原には色とりどりの小花がバスの車窓から見られ、途中でバスを止め周



天生橋にて *Incarvillea mairei*



シャングリラ郊外の小川の
流れる湿地で
黄花の*Primula sikkimensis*



シャングリラ近郊の草原にて
Iris brubatulata



白い台地の白水台 上部は棚田のように

辺を散策。背丈10cmほどのイリス (*Iris brubatulata*)、ペルシカリア、春咲きの小型リンドウ、キンボウゲの仲間などが咲き乱れている。

納帕海（依拉草原）は、期待はずれで雨も降り出したので、早々に退散。

16：00 香格里拉植物自然保護区に到着。ここは道路に面し、小高いガレ場というところ。雨が上がるのをバスの中で待つ。ここで、初めて青いケシ (*Meconopsis prattii*) と出会う。真っ赤なアンドロサセ (*Androsace bulleyana*)、ジンチョウゲ科クサジンチョウゲ属の黄色の小花を付けている *Stellera chamaejasme* など、春の花が咲き始めたばかりという景色である。

17：30 松贊林寺の近くにあるチベット料理の店で夕食。ヤクや羊の肉料理や鍋料理。

● 6月29日

トンパ文化発祥地のひとつ白水台へ

8：00にホテルを出発し、バスで白水台へ向かう。

今年は、雨季が遅く、開花が遅いという。しかし、バスの車窓からは、様々な花が通り過ぎてゆくのが見え、そのたびに歓声が上がり途中2箇所バスを止め花の撮影に興じる。最初の停車は青いケシ、エリゲロ

ン、シノグロッサムなどが点々と咲いているガラ場。

次に止まったところは、小川が流れる湿地。桃 (*P. poissonii*)、黄色 (*P. sikkimensis*) のプリムラ、背丈50cmほどのアヤメ (*Iris bulleyana*)、小型のシオガマ (*Pedicularis siphonantha*)、小型のランに見間違えうショウガ科の *Roscoeia tibetica* など、足の踏み場も無いほど。

11：20、白水台の入山口に着く。ここは、標高2400m程などで、呼吸が楽にできる。昼食後、ごうごうと音を立てて流れる小川の脇の遊歩道を上り始める。

白水台は、大地の上から流れ出る湧き水に含まれている炭酸カルシウムが山肌を覆って白い台地になったという。台地の上は、水が幾筋も流れ、プリムラ類、ユーパトリウム、ヤマボウシ、大型の桃色のタリクトラム、淡い桃色のアンドロサセ、春咲きのリンドウの仲間があった。

14：00に白水台を出発し、帰路に。シャングリラのそばの属都海と呼ばれる湖へ向かう。

途中、花の撮影タイムでバスを停車させる。ここでは、プリムラやイリスの他に *Nomocharis forrestii* が点々と咲いていた。

属都海はシャングリラから36kmほど離れ、標高



白水台～シャングリラにて
Nomocharis forrestii



属都海にて
Thermopsis barbata

3,700mほど、湖・草原・森林が幻想的な風景を織り成す場所。湖周辺は草原になっていて、銀葉と濃い紫の花の対比がシックなマメ科の *Thermopsis barbata*、小型のペルシカリアの仲間、*Anemone obtusiloba*、*Erigeron*、*Roscaea* などが見られた。

帰途、木に絡みつきチョコレート色の花を咲かせているクレマチス (*Clematis pseudopogonandrs*) の場所でバスを止め撮影タイム。今日の花の出会いに満足し、ホテルへ。

● 6月30日 (木)

世界文化遺産の都市、麗江へ

終日、バスにて麗江への移動日となる。8:00ホテル出発。シャングリラとの別れを惜しむよう、峠付近でバスを止め、花の撮影。アネモネの仲間、アンドロサセ、マツムシソウ科の *Morina nepalensis* などが木漏れ日が当たる林床に生えている。

11:10虎跳峡着。虎跳峡は高低差3,790mの世界で最深の峡谷の一つである。駐車場から茶色の激流の側まで往復1800段の階段を行く。

昼食後、諸葛亮孔明がここを通過して孟獲を倒したと

いう歴史的名刹で、流れが120度湾曲し向きを変える長江第一湾へ。

15:00に今晚宿泊する麗江のホテルに着。麗江は、標高2,300m、年間平均気温6.6～18.8℃と過ごしやすいところ。ナシ族を中心に、ペー族、イ族、リス族などの民族が住んでいる。

16:00にホテルを出て、1997年、ユネスコの世界文化遺産に指定された麗江古城へ。

夕食後、19:30より、市内のホールにて少数民族のショーを観劇。少数民族の特徴ある衣装・風習がミュージカル風にアレンジされたショーであった。

● 7月1日 (金)

青いケシを堪能した老君山へ

7:00にジープ6台に分乗し、ホテルを出発。1時間あまりは舗装された道を走ったが、その後は、未舗装の細い山道。

9:50老君山入山口に到着。開けた草地にツツジのブッシュ、黄色のスミレ、ノモカリス、ゲラニウム、プリムラ、ポテンティラなどが咲いている。

急勾配の山道を、ぐんぐん高度を上げながらジープが走る。石楠花の里といわれるくらいシャクナゲは多いが、すでに花期が終わり、所々に咲き遅れの花が見られる程度。

10:50登山口の駐車場到着。標高3,780m。針葉樹の高木と樹高5mを越えるような白い幹のシャクナゲが混生した林で、枝にはサルオガセ類が垂れ下がっている。駐車場の下方は湿地帯になって、ワタスゲがベージュ色の花を咲かせ、ブルーのコリダリス、黄色のポテンティラ、紫のプリムラ (*Primula poissonii*) などが咲き乱れている。ブルネラのような大型のムラサキ科の植物、青いケシなどもみられた。

昼食後、12:15、いよいよ花を求めて4,000m近くまでのハイキング。3時間ほどでハイキングコースを1周できるという。

13:00、下と上へ向かう分岐点に到着。足と呼吸に自信のある4人が1周に挑戦。残りは、分岐点周辺を散策することになり、二手に分かれる。

シャクナゲ主体の林の中は厚くコケが覆い、イワヒゲ、ベルゲニアなどが、尾根沿いにはギンロバイ、小型のシャクナゲ、タデ科の *Koenigia* などがみられた。遊歩道の上部は池が3段に連なり周囲は湿原になって、リュウキンカ、濃い紫色のプリムラ (*P.deflexa*)、*Morina nepalensis*、シオガマなどが花を咲かせている。



老君山にて ダイオウ *Rheum alexandrae*

また、池の周囲にはダイオウ (*Rheum alexandrae*) が点々と白い姿を見せている。3段目の池から皆と分かれた分岐点へ向かう道の両脇は、林の中のお花畑である。ここは、背丈1mほどの青いケシが群生し、ピンク、赤、黄色のものまであり、青いケシというより“七色のケシ”と呼んだほうがよさそうである。

15:40、老君山出発。途中から雨になったので、帰りは、撮影タイムなしでホテルへ。

19:00、麗江着。夕食は、雲南名物のマツタケやキノコを使った料理で、一日早いさよならパーティー。

● 7月2日(土)

昆明へ

麗江から40分あまりのフライトで昆明空港に着く。昆明は、雲南の省都として元の時代から栄えた都市で、別名を「春城」といい、常春の土地である。

斗南花卉という大きな市場へ。ここは、生産者が直接切花を売買する相対取引場と消費者も購入できる中



昆明の斗南花卉にて
生産者が直接切り花を
持ち込んで売っている

卸のような場所とに分かれている。

5分ほど歩いてセリをする建物へ。オランダ式のセリ下がり式が取り入れられている。

昼食後、昆明の花博会会場跡へ。カートに乗り会場を1周する。

16:50、「雲南民族茶道館」へ。特徴ある4種類の中国茶を頂く。

夕食後、空路広州へ。22:00広州着。ホテルへは、23:30着。

● 7月3日(日)

帰路へ

いよいよ、最終日。ショッピングの後、広州市民が利用する自由市場に行く。生きているサソリ、蛙など東南アジア・中国と思わせる食材が溢れている。

昼食は、飲茶でこれが最後の中華料理となる。それぞれの土地の特徴ある料理を頂いたが、香辛料の強さと油の多さで、少し辟易気味となってしまった。

現地時15:30広州を出発し、20:30成田着。軽い高山病の中で出会った青いケシやプリムラなどの花たちをお土産に、それぞれの家路についた。



麗江古城にて 調査団メンバー19名



日本の絶滅危惧植物図譜

日本植物画倶楽部・大場秀章監修・解説
普及版 A4 上製 400頁 7000円税込(定価9800円)
特装版 A4 箱入 182葉 額装可 解説冊子つき
17500円税込(定価25000円)

絶滅危惧種182種を植物画と平易な植物解説(英訳つき)で紹介。内外で絶賛!

日本花名鑑①②③

安藤敏夫 小笠原亮監修
B5 各2000円税込(定価各2980円)

名称を整理し表記法の安定を目的とする計15000種類の最新流通植物名称事典!

日本で育つ熱帯花木植栽事典

坂崎信之編著
B5 上製 1228頁 31000円税込(定価61950円)

露地栽培が可能な美しい熱帯性花木2236種類の詳細なガーデニングマニュアル!

小笠原植物図譜増補改訂版

豊田武司編著
四六変 上製 528頁 7000円税込(定価10000円)

固有種が多い小笠原植物を鮮明な写真とスケッチで紹介。小笠原植物図鑑の決定版!

花葉会会員の方へ上記特価にて販売いたします。(注文時に花葉会と明記)

株式会社 アボック社

〒247-0056
神奈川県鎌倉市大船2-14-13
TEL 0467-45-5119
FAX 0467-45-5132
E-mail info@aboc.co.jp
http://www.aboc.co.jp/

植物についてのこだわり
エッセイ
「あぼく植物名通信」
配信中
配信登録(無料)は
当社サイトより

ハイジの国から、直輸入!日曜大工で出来る、木製バルコニーフェンスキット!

ALPEN BALCONY

家を手で造る。木製バルコニーフェンスキット。1.5m幅、1.5m高さ、1.5m長さ。木製フェンスを組むだけで、簡単に、安全に、美しいバルコニーが出来ます。

フェンスの長さ: 1.5m、2.0m、2.5m、3.0m、3.5m、4.0m、4.5m、5.0m、5.5m、6.0m、6.5m、7.0m、7.5m、8.0m、8.5m、9.0m、9.5m、10.0m

フェンスの高さ: 1.5m、2.0m、2.5m、3.0m、3.5m、4.0m、4.5m、5.0m、5.5m、6.0m、6.5m、7.0m、7.5m、8.0m、8.5m、9.0m、9.5m、10.0m

フェンスの幅: 1.5m、2.0m、2.5m、3.0m、3.5m、4.0m、4.5m、5.0m、5.5m、6.0m、6.5m、7.0m、7.5m、8.0m、8.5m、9.0m、9.5m、10.0m

アルペンバルコニー社
東京都杉並区大宮1-19-3 Tel.& Fax.03-3311-3905

花と緑のある暮らしのお手伝い

九州日観植物株式会社

地方卸売市場
代表取締役社長 西川 勲

〒818-0013 福岡県筑紫野市大字岡田310-1
PHONE (092)926-1238(代表) FAX (092)926-5984

グリーン情報

植物/園芸/造園・エクステリア
ガーデンビジネスの情報満載

毎月1日発行・定価1,400円(税込)/年間購読16,800円

まずは見本誌をご請求ください
(株)グリーン情報

〒451-0045
名古屋市中区西区名駅2-25-10 ヤマエビル4F
TEL052-571-2200(代) FAX052-571-2208
ホームページ http://www.green-joho.jp

グリーン情報好評単行本

- ◆日本における園芸療法の実際
グリーン情報編 5,040円(税込)
- ◆全国園芸店名簿
グリーン情報編 8,400円(税込)
- ◆ガーデンセンターのすべて
田住治之著 7,140円(税込)

グリーンダイナミクスグループ

㈱グリーンダイナミクス/㈱ベレニアル/㈱メネット

グリーンダイナミクスグループは、植物の未来を切り開き、皆様に花と緑とのふれあいのすばらしさ、喜びをお伝えすることにより、その普及や関連産業の振興を図り、もって美しい国づくりに貢献したいと考えます。

〒270-0034

千葉県松戸市新松戸 4-65-1 和光新松戸ビル 4F
TEL:047-348-6959(代表) FAX:047-343-7650
URL: <http://www.green-dynamics.com>
E-mail: mail@green-dynamics.com

■花と緑に関するイベントや施設などの総合プロデュース

■植物園や庭園、花壇、屋上緑化などの設計・施工・管理

■バラを中心に、多様な植物の調達・販売

■花や緑のディスプレイの企画・設置・実施運営

■花と緑に関する調査・研究・コンサルティング

バラの総合カタログ「百華日録05秋～06春号」は、多くのお客様から大変好評をいただいております。

「百華日録」に関するお問い合わせは(株)ベレニアル(047-348-1231)まで

賀来宏和	S54 脱了	秋葉伸之	H8 生卒
賀来佳子	S54 還卒	謝礼知子	H8 生卒
河合伸志	H6 脱了	片山雅介	H13 脱卒

— 花産業のコーディネーター —

花鉢・花壇苗の生産、卸、小売、花造園、企画開発、不動産
押花、フラワーデザインスクール、ブライダル



Vivoショップ

Vivo本店

TEL: 045-833-2827

FAX: 045-833-5697

花造園課 TEL: 045-832-3752 FAX: 045-835-3438

不動産課 TEL: 045-832-3076 FAX: 045-835-3438

<http://www.e-87.co.jp> E-mail: info@vivo-gt.co.jp

株式会社 **グリーン武内**

(本社) 横浜市洋光台1-13-30

TEL: 045-833-2827(代)

FAX: 045-833-2416

有限会社グリーンラブ

(本社) 横浜市洋光台1-16-7

TEL: 045-833-9137

(花工場) TEL: 045-844-7541

輸入花木と園芸資材はしばみちで

みどりと花の郊外ガーデンセンター

外国樹種の直輸入と生産販売!!

しばみち本店

〒334-0825

埼玉県川口市大字赤山948

☎(0482)96-3506代

しばみち本店園芸部

川口市大字赤山221

道順

☎(0482)96-0566

船ヶ谷よりバス
5分。バス停タ
ルワ下車1分。
赤山山王神社そば



姫 柿 (Princess Persimmon)

[学名] E. japonica (Hort.) Siebold

2000年10月発行
3,400円(税送料込み)
お問い合わせは樹芸へ



株式会社 樹 芸 [JUGEN]

〒277-0033 千葉県柏市増尾 2-11-19

Tel. 04-7173-0908 Fax. 04-7173-9085

(ホームページ) <http://www.hemegaki.co.jp>

美しい植物画の豪華大型本が復刊！

増補 原色日本産

ツツジ・シャクナゲ 大図譜

本書の三大特徴

ボタニカルアートの第一人者太田画伯の植物画。
新原種・分類・系統の学術的研究の成果を追補。
北海道から沖縄までの希少原種と自生地分布図。

富樫誠 著・太田洋愛 画・倉重祐二 補遺
B4判上製・272頁・外箱入り・限定復刻版
定価39,900円(本体38,000円) ISBN4-416-40503-0

誠文堂新光社

東京都文京区本郷3-3-11 <http://www.seibundo-net.co.jp/>
TEL.03-5800-5780 FAX.03-5800-5781 定価税込



花のアートとビジネス誌

フローリスト

●毎月8日発売／通常号定価840円

次世代の生産・流通情報誌

農耕と園藝

●毎月23日発売／通常号定価950円



カキツバタ育種・生産

からころも
きつつなれにし
つましあれば
はるばるきぬる
たびおしぞおもふ

名古屋園芸

〒460-0005

名古屋市中区東桜2-18-13

TEL 052-931-8701

FAX 052-931-8727

カタログは、下記のHPをご覧ください。

<http://www2.starcatt.ne.jp/~hanaya3/>



誠実と信頼のシンボル
フタバ印

野菜種子
牧草・飼料・緑肥種子
草花種子・球根・観葉草
埼玉特産大和芋・里芋・甘藷苗

種子用馬鈴薯・生薬
果樹苗・花木苗
農業用フィルム・ハウス
農業用生産出荷資材

農業用各種器材
園芸用品全般
肥料・農薬
緑化資材・造園工事

オランダ Griendtsveen社製フローズン・ブラックビートモス輸入発売元
生産・卸売・小売・輸出入

S39園卒 野原 宏

野原種苗株式会社

〒346-0002 埼玉県久喜市野久喜1番地

☎ 0480-21-0002

FAX 0480-23-5005

明日の園芸を創るパイオニア



(株)ハーベストガーデンシステムズ

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤1-18-23

代表取締役 松田 一良

TEL 03-3425-8987

FAX 03-3425-8953

井手 みえこさんを偲んで

植 村 猶 行

卒業と同時に記者として日本農業新聞社に入社した貴女が、初めて私をお訪ねくださって、「ガーデンライフの編集部に入りたいが…」と話されたのには驚きました。創刊5年目で、その年も新入社員を1人貰って、総勢7人になったばかりで、応じることができませんでした。

その翌年海外旅行が解禁になり、アメリカ西海岸の花事情視察が実現し、総勢131名で、貴女もご一緒に出掛けましたね。

園芸文化協会で協力

一方私は、社の了解を得て、昭和40年に(社)園芸文化協会の理事に就任し、常務理事だった上司の小松崎英男氏と共に、会報の編集を担当していましたが、誌名を「園芸文化」と改題して月刊化した折、貴女にお手伝いをお願いしましたね。

その後、貴女も協会の参事に就任し、日本橋三越本店の「花の文化展」や、新宿御苑の「園芸文化展」の企画や設営は勿論、記録誌の編集まで手伝っていただきました。

大阪花博‘90でもまた

平成2年4月1日から9月30日までの183日間、大阪市の鶴見緑地で開催された「国際花と緑の博覧会」では、私が政府苑の花と緑担当のプロデューサーで、貴女は電通・東急エージェンシー合同の専門家集団の一員として、展示・運営の計画立案と推進などの仕事に参画し、昭和62年12月11日から平成2年11月30日までの間に、24回ものプロデューサー会議を開いて精力的に討議検討しましたね。特に貴女は「フラワーワールド」の担当者として、大変苦勞されましたが、その過程で多くのことを学び、以後の活躍の基礎となったように思われます。

意志の強い男勝り

貴女の努力と意志の強さは抜群で、常人の遠く及ばないところ、俗に言う男勝りで、稀に見る逸材でした。「花葉会」でも2001年に岩佐吉純幹事長の後を受けて代表幹事に抜擢されましたが、病を得て、その真価を発揮できなかったのは、返す返すも残念です。ご冥福をお祈り申し上げて筆を擱こう。

○井手 三重子 (いでみえこ) の履歴

1944年 昭和19年1月2日 東京都品川区生まれ

四人姉妹の次女

太平洋戦争のさなか、生地西品川は日本で最も早く空襲



2001年9月花葉会総会にて

を受け、父親が出征したので同年の夏、葉中他の親類がある伊良子岬に疎開した。疎開先の家は地域の温室園芸の指導的役割を果たしており、後に井手みえことして仕事をするにもお世話になった。

品川区で三ッ木小、伊東中学で過ごし、川崎市の向ヶ丘遊園に転居して、ここから都立明正高校、千葉大学に通った。高校で文芸部、卓球部で、なぜ園芸学部を選んだのか理由はよく分からない。父は法律関係だったが、母は化学。一族は理系、工学系が多く、姉が生物部で採集した植物の標本づくりを年中手伝わせていたことも関係あるかもしれない。入試が終って問題一つ間違ったのが合否の境目だと言っていたが、落ちたかと思っていたら4月1日になって補欠合格の連絡が来た。本人曰く正真正銘のビリ入学、卒業はビリから3番目だと自慢していた。

学生時代には晴海でしばしば開かれた大規模な国際見本市のアルバイトで、美大生にもぐりこんで模型作りや図面かき、展示などを体験していた。学生の頃、古在由重氏が父親と同じ大学に移ってこれ、子供たちがクラスメートだと親同士話題にしたと聞いている。

1967年卒業後、農業新聞就職は、本人の文学趣味と専攻が生かしたスタートだった。その後出版界と園芸との組み合わせは、学部の強力な人脈のおかげで、先輩に引き立てていただき、自分の感性と環境を軸に時代の方向を自然にたどって行けた。1972年カナダ留学、カルガリーやアルバータ大学等の講座で先住民と民俗学的植物誌に目を向けるようになった。

姉妹の中で最も気が強く、勝負事にも強かったのに、つましく生活を楽しむだけで、全般に不確かなことは決して手を出さない。良くも悪くも受けた教育の科学的訓練の結果であると言っていた。巨大資本を動かせる立場だったら何をしたか、やらせてみたかったと家族としては思う。

(姉 井手 暢子)

動き出した生産者育種 — その様々な展開 —

(株)サカタのタネ 西日本支店 久保田 芳久

第22回2005花葉サマーセミナーは7月23日(土)～24日(日)に、会場は昨年同様、飯田橋駅近くにある千代田区富士見の日本歯科大学本館・富士見ホールにて開かれました。参加者数298名(うち幹事、講師、記者、発表者、学生等関係者計96名)。

今回のテーマ「生産者育種」は、昨年の「もう安売りは御免だ! 進む花の産業革命をつかまえる」の締めくくり、安藤教授の講演にあったキーワード「生産者育種のすすめ」から発展した形で企画されました。

育種は国や研究機関でするもの、種苗会社でするものがあるなか、「生産者育種」をどう捉えるか、そして成果をどう生かすか。その中で本日の講師とその内容の意義・どこを聞いて欲しいかを長岡幹事長から挨拶とともに紹介され、開会となりました。

◎ 7月23日(土)

「生産者育種の仕組みをまじめに考える」
千葉大学園芸学部 教授 安藤敏夫 氏



今回掲げたテーマの「なぜ」と「意義」と農家や普及員の「取るべき姿」につき、現在の状況や環境を精細に捉えた上で、かなり論理的に「まじめに」展開された内容となりました。

花卉産業は超多品目であり、F₁品種を除いた多くは幼稚な段階でしかなく、対象は数限りがないのです。よって論点は「片手間育種の勧め」であり「育種は手

段であり目的ではない」とし、育種の魔力に取り付かれないことを警告しました。育種圃場は金を生みません。生産圃場が育種圃場で占められ、貧困に陥ったケースもあるからです。

狙い目が示されました。①種子系やF₁は考えず、栄養系で行こう、②文化の違い・感性の違いからバタ臭いものの中の日本に向くもの、③栄養系の種子を播く、④発達した花卉に野生種を交配、としてそれぞれ実例が挙げられました。その簡単さに“瓢箪から駒!”、あの人のあの品種がと、皆驚いた様子でした。

育種したものの扱いやその奨励に関し、種苗会社、地方自治体、農水省、生物多様性条約などとの関連やそれらに望むことが示され、「播いたことの無い種子を播く」として締めくくられました。

「生産者育種を支えるブルーリボンの伝統とシステム」
福岡県農業総合試験場豊前分場長 小林泰生 氏



昭和13年に設立された花卉生産者の連合組織である福岡県花卉園芸組合連合会(福岡県花卉連)において、新品種の育成助長、権利保護、普及促進などを目的に「福岡県新品種審査会」が設立されております。この会が設立された背景や目的、果たしてきた役割、登録された新品種の内容などについて紹介されました。

審査の採点項目は国の種苗登録制度と異なり、区別性、均一性、安定性の他に観賞価値はもちろんで、商

品価値や市場性により重点が置かれました。そして優秀と認めたものは90点以上でブルーリボン賞、80～89点がピンクリボン、70～79点をイエローリボンとして表彰しています。新品種審査会で登録された218件のうち、ブルーリボンが71件、ピンクが94件、イエローが53件です。対象品目は切花・鉢花にわたり、和洋幅広いものです。

坂本元蔵（天明～寛永）により行われた久留米つつじの品種改良に始まる伝統は今日まで生かされています。今活躍中の有力な方やグループの紹介が行われました。また今後の展開方向として行政の技術支援を含めたビジョンが示されました。

「産地育成に生産者育種を生かして

—想いがかたちになる時—

兵庫県立農林水産技術総合センター園芸部

研究主幹 宇田 明 氏



淡路島は花の産地として古くから栄え、名をとってきました。キンセンカむらじ等の固有品種は関西でしっかり定着し、他の品種では関西市場に通じません。しかし、特別な個人がなくて成立した、地域の衆が成した成果であり、福岡県の有力個人の育種と性格を異にします。今回の副題「その様々な展開」とし、異なるパターンに研究機関として深く関与してきた宇田さんに講演いただきました。

その生産者育種を3種類に分類し、ピラミッド構造の頂点に企業的育種を据え、5%の有力農家の場としました。底辺は種子採り育種で、直売所など品種や花色、形質のばらつきにこだわらない仕向け先形態で、「できちゃった育種」としました。

そして今回の提案が「宝くじ共同購入育種」です。どちらにも属さない80%の農家を対象とします。交配に向く時期、農家は出荷に終われ、選抜・交配・採種ができません。宇田氏等が交配して種子を採るとバケツ一杯の種子が採れました。この中からいいものを選

抜するには、より多くの面積に播かないと、なりません。これを農家に配り、播いてもらい、皆で選ぶというのです。よって宝くじの確立で良いものが出るため、宝くじ共同購入育種といいます。

しかしこの問題点も現場の苦労人としてしっかり列挙しました。意欲の持続性、むらのあいまいな責任体制、指導者の移動、公務員主導の県庁向き（実より名）、安易な技術志向、捨てられないなど、多数です。3年以内の新品種育成と、コツコツと息長い取り組みを説きました。

「自分でチャレンジ！ 種苗登録」

千葉大学環境健康都市園芸フィールド科学センター

渡辺 均 氏



法律家や農水の立場でなく、実際に育成植物を登録した人の経験による、農家でできる種苗登録の方法を講演して頂きました。できちゃった育種であっても登録はできますよという内容です。必要な書類、書類の作成、出願、調査、登録と登録料の納付などです。そのときになってあわてるのが対照品種の入手だそうです。わからない時はFAXなどで種苗課品種登録班に問い合わせると丁寧に教えてくれるそうです。

「三步先を行くアメリカの花壇苗産業

—新時代の花弁育種—

ボジャーシーズ

チーフリーダー 有光芳郎 氏

育種を取り上げる以上、農家の簡単な交配を進める中、きっちりした育種の話、本格的なプロの技法と問題点や仕事を紹介することも必要と捉えました。花の先進国アメリカに渡り、花の育種で数々の成果を挙げられた有光さんに来日いただき、本場の話を開示していただきました。



有光芳郎 氏

近年史として Claude Hope 氏、Chrles Weddie 氏、John Mondry 氏の事を紹介し、アメリカが如何に早くからベディングプラントの改良に力を注いできたか実感できました。営業育種にポイントを絞り、育種親や原種の収集、育種に取り掛かるプロセス、選抜について、交配に関して、品質検定など、具体的に植物の画像まで用いて説明していただきました。特にマリーゴールドやジニアには並々ならぬ労力と工夫、技術開発が行われたようです。最近の栄養系と実生系の接近・協力の事、企業ブリーダーで扱えない品目の個人ブリーダー品種の登場などに話が及び、特に個人の方へのアドバイスをいただきました。

〈総合討論〉

途中の講演での質問も含め、熱心な質疑が行われました。「種苗登録されたものでも育種に使えるのか」の辺りに多くの普及員が釈然としないものを持っていることが分かりました。この受け答えには農林水産省の生産局種苗課課長補佐石川君子さんにも答弁頂き、詳しい説明をしていただきました。

◎ 7月24日(日)

「私はこうして育種成果を経営に取り込む」

㈱末継花園 代表取締役 末継 聡 氏



前日の講演を受け、具体的事例として、トルコギキョウの自家交配品種を経営に導入して注目されている若い切花生産者の末継氏に、その経営を発表していただきました。

末継氏のユニークな点は圃場の隅の僅かな面積で交配と採種を行い、種子が実る間、ユリの切花に支障なく圃場を回していることです。経営面積に占める比率は0.3%以下。手軽にこなしながら、市場の欲しがる品種をだしていることです。

「吉村ブランドを支える私の育種と経営スタイル」

㈱ワイルドプランツ吉村

代表取締役 吉村人志 氏



元気いっぱいの講演でした。吉村氏の半生とそのエネルギーな活動が紹介されました。飽くなき植物への興味とその商品性発見に卓越した感性をもち、それを交配、選抜にいかし、微生物農法と絡ませ、成果をあげています。圧倒される時間でした。

「インターネットによる

新遺伝資源の探索と導入 part II」

千葉大学名誉教授 横井政人 氏





種苗会社自慢の新品展示コーナー



会場風景



総合討論は活発に行われた



1階ホールにおける懇親会

第18回サマーセミナーでのインターネット活用植物探索が好評であったことから、今回のテーマに則り、partⅡが企画されました。今回は実際に探索しやすいよう、Yahoo、Googleの使い方に始まり、A. 全体的な検査項目、B. 植物各論・検査項目、C. 夢の植物探索・育成・遺伝・育種の3部に編集されました。丁寧な説明に、使い方の解った聴衆が多かったと思います。



初日に震度5強の千葉県北西部地震があり、怖い思いをし、またエレベーターが止まり、8階の会場から1階の懇親会場まで階段で降りていただきました

た。また国電も止まり、ダイヤが混乱する中、ご不自由をおかけしましたが、整然と行動していただいたことに感謝いたしました。

育種という構えがちですが、このセミナーを聞かれた方は、“入りやすい”という、なんらかのきっかけを得ることができたと思います。

◎テキスト購入ご希望の方は、代金2,000円（送料込み）を添え、下記へお申し込みください。

〒271-8510 松戸市松戸648

千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室「花葉会」事務局

TEL:047-308-8810 郵便振替：東京5-13341 花葉会

花葉会総会

平成16年度の花葉会総会は、10月16日(日)午後2時より、芝パークホテルで開催されました。出席者は68名、定刻通り始まり、宮田幹事の司会で進行されました。

最初に安藤敏夫会長より、井出みえこ前代表幹事の死去について話があり、次に学内の近況報告がありました。「4月から古在豊樹先生が学長に就任し活躍されています。それに伴って学部内の人事も異動があり、前学部長の天野洋先生が千葉大学の理事に、園芸経済学科の菊池眞夫教授が学部長、私がセンター長に就任しました。また、上田善弘助教授が3月31日付で、岐阜県立国際園芸アカデミーに教授として赴任、9月1日付けで國分尚が助手から助教授に昇格しました。

センターは8月24日につくばエクスプレスが開業し、秋葉原から30分の柏キャンパス駅から徒歩5分の立地になりました。センターは園芸を基盤とし、人間の専門家とのハイブリッドで生まれた新しい学問を研究テーマにしています。エビデンス(科学的根拠)に基づく園芸療法を提言し、医食同源をテーマに薬膳を広めてゆく環境を整えたり、ケミカルフリータウン(有害物質を取り除いた住宅)が建築され環境の化学物質の研究が開始されます。千葉大学固有の学問を発展させて、今後大きく変換して行くことでしょう。毎年、新しいことが報告できると思います」と、締めくくられました。

次いで、午前中の幹事会で推薦された長岡求幹事長が議長に指名され、議事に入りました。議題は次の通りです。

平成16年度事業報告

- ① 7月24・25日
第21回花葉サマーセミナー
- ② 10月2日 総会
- ③ 花葉会賞の贈呈
16年度の受賞者は板倉信夫氏(昭29別)、河野幹司氏(昭30)、原幹博氏(昭37)、高林成年氏(昭38)の4名であった。
- ④ 6月27日～7月5日
第15回海外園芸事情調査
- ⑤ 12月10日「花葉」24号発行
- ⑥ 幹事会の開催は、平成16年4月24日、6月19日、7月25日、8月21日、10月2日、11月4日、平成17年2月5日、3月26日の8回。

平成16年度会計報告

収入の部

前年度繰越金	2,134,327
会報広告料(22号)	1,058,740
サマーセミナーテキスト売上	88,000
書籍売り上げ	4,500
卸用カタログ売上	53,000
協力金	34,720
セミナー収入	498,577
出版会計より	1,500,000
雑収入	335,465
預金利息	11
合 計	5,707,340円

支出の部

印刷費	95,025
会報関係	1,586,169
通信費	136,690
運送費	8,020
記念品代	102,900
会議費	132,706
事務費	585,243
賃金	179,760
慶弔費	5,008
税金	70,000

雑費	153,631
合 計	3,055,152円
差引残高	2,652,188円

2004年サマーセミナー会計報告

平成16年7月24・25日 日本歯科大学富士見ホールにて開催。
参加者数345名(うち幹事、講師、記者、発表者、学生等104名)

収 入

受講料	
@30,000 × 202名	6,060,000
@27,000 × 37	999,000
@18,000 × 2	36,000
合 計	241名 7,095,000円

支 出

会場費	3,139,821
印刷費	720,975
運送費	210,400
講師謝礼	750,000
講師旅費宿泊費	936,244
通信費	30,500
事務費	369,128
会議費	300,000
税金	55,555
広告費	58,800
備品費	0
雑費	25,000
合 計	6,596,423円
差 引	498,577円

平成17年度事業計画案

- ① 第22回2005年
花葉サマーセミナー開催
平成17年7月23・24日(土・日)
日本歯科大学富士見ホール
- ② 花葉会賞の贈呈
- ③ 第16回海外園芸事情調査
- ④ 「花葉」24号 発行
- ⑤ 花産業必修1000属検定

平成17年度予算案

収入の部

前年度繰越	2,652,188
会報広告料	1,100,000
テキスト売上	50,000
その他の収入	400,000
預金利息	100
合 計	4,202,288円

支出の部

印刷費	150,000
会報関係	1,500,000
通信費	150,000
運送費	20,000
記念品代	120,000
会議費	200,000
事務費	300,000
賃金	400,000
慶弔費	50,000
税金	70,000
雑費	572,288
予備費	670,000
合 計	4,202,288円

基金報告

前年度残高	25,970,829
きょ金	1,314,940
定期利息	6,080
預金利息	14
合 計	27,291,863円

(平成17年3月31日現在)

役員改選

安藤会長より、井出みえこ氏の死去に伴い幹事名簿からの削除と、上田善弘氏転出に伴い、國分

尚氏を副会長にとの役員の一部変更の提案があり、拍手を持って承認されました。

その他

出席者より花葉会会員の名簿を作成頒布して欲しいとの要望が出ましたが、個人情報保護法の関係ですぐには答えが出せず、幹事会での検討事項となりました。

なお、それぞれの議題は、拍手をもって承認されました。

花葉会賞贈呈

総会終了後、花葉会賞の贈呈式がありました。鈴木司幹事より、落合哲平氏（昭30別了）、青島尚祐氏（昭31園卒）、千藤猛司（昭31別卒）、竹下大学（平1園卒）の4氏が紹介され、安藤会長より賞状と記念品が授与されました。

受賞者を代表し、千藤猛司氏より「身に余る光栄です。ありがとうございました」と、挨拶がありました。

田中桃三副幹事長の閉会の挨拶で、無事、総会・花葉会賞贈呈式は終了しました。

記念講演

國分尚氏が助教授・副会長就任挨拶を兼ねて「アメリカの植物園に勤めて」と題して、勤務されていた3カ所の植物園と携わってい

た仕事について、スライドを交えて30分ほど講演をしました。

次に受賞者を代表して、竹下大学氏が「日の丸ブリーダーの一人として一新規参入企業のサバイバル育種」と題しての講演。育種する信条を吐露しながら、学生時代の思い出から現在までのことをユーモア溢れる語り口で話され、時々会場からは笑い声が上がりました。講演の後半は後輩へ向け、ご自身の経験を交えて、仕事や会社での生き方などのアドバイスとなっていました。

懇親会

午後5時より、田旗裕也・西原彩子両幹事の司会で懇親会が始まりました。最初に安藤会長より「2009年は園芸学部発足100年を迎えます。私たちは、この伝統の上に成り立っています。花葉会は様々な人材が居て、いい仕事をしています」と挨拶がありました。

次に花葉会賞を受賞された青島尚祐氏から「今日は名誉ある賞を頂き、ありがとうございました。幸せな“花の生涯”を終えることを期待しています」と挨拶があり、続いて、乾杯の発声を落合哲平氏が行いました。途中、今春転出された上田善弘氏の近況報告があり、和やかな雰囲気で行いました。閉会の挨拶は鶴島久男相談役が行いました。

(文責：編集部)



花葉会会則 (2003/9/27)

〈名 称〉

第一条 この会は「花葉会」という。

〈事務局〉

第二条 この会の事務局を千葉大学園芸学部生物生産科学科花卉園芸学研究室室内におく。

〈会 員〉

第三条 本会の会員は、千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室並びに附属農場花卉部に在席した者、及び戸定会会員で現在花卉関連業務に携わる者、
(2) 内地留学生、研究生、聴講生、その他本会の主旨に賛同し、総会の承認を得て所定の手続きを終えた者とする。

〈目 的〉

第四条 この会は会員相互の親睦、研さんと情報交換を図ると共に、花卉園芸界の発展に寄与することを目的とする。

〈事 業〉

第五条 この会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
①総会 ②親睦会 ③研究会
④会報、名簿等の発行 ⑤功労者の表彰 ⑥その他、前条の目的を達成するために必要な事業。

〈役員等〉

第六条 この会に次の役員をおく。
①会長1名 ②副会長1名
③幹事長1名 ④副幹事長3名
⑤年次代表幹事 若干名
⑥幹事50名以内 ⑦会計監査2名
(2) この会に名誉会長をおくことができる。
(3) この会に顧問、相談役を若干名おくことができる。

〈役員等の選出と役目〉

第七条 会長は総会の総意により推戴し、会務を総括し、会を代表

する。

(2) 副会長は総会の総意により推戴し、会長を補佐し、会務を処理する。

(3) 幹事長は幹事の互選により選任し、幹事会を主催し、会を代表して会務を処理する。

(4) 副幹事長は幹事の互選により選任し、幹事長を補佐し、会務を処理する。

(5) 年次代表幹事は幹事の互選により選任し、世代の意見を集約し、会の運営に寄与する。

(6) 幹事は会員の中から互選する。

(7) 幹事は幹事会を組織し、議事を審議決定し、会の事業を執行する。

(8) 会計監査は会員の推薦により会長が選任する。

(9) 会計監査は会の会計を監査する。

(10) 名誉会長は会員の中から総会において推戴する。

(11) 顧問、相談役は会員の中から幹事会の協議を経て会長が委嘱する。

〈役員の任期〉

第八条 役員の任期は2年とし、再選を妨げない。

〈会 計〉

第九条 この会の経費は会費、寄付金、収益金をもってあてる。

(2) 本会の収支予算及び決算は幹事会の議決と会長の承認により定められ、決算は会計監査の監査を受けなければならない。

(3) 会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

(4) 会費は必要に応じ幹事会の議決と会長の承認により徴収する。

〈会 議〉

第十条 総会は年1回とし、会長が召集する。

(2) 幹事会は必要に応じ、会長が召集し、会務事項について審議する。

(3) 総会の議事は出席会員の2/3以

上の賛成がなければ議決できない。

〈会則の変更〉

第十一条 この会則は総会の議決を得なければ変更できない。

〈附 則〉

この会則は、平成15年9月27日より施行する。

この会の細則については、幹事会にはかり、会長が決定する。

花葉会 役員 (2005/10/16)

顧 問：小杉 清

相談役：岩井英明、岩佐吉純、
魚躬詔一、植村猶行、
小田善一郎、鶴島久男

会計監査：花岡喜重、林 角郎

名誉会長：横井政人

会 長：安藤敏夫

副会長：國分 尚

幹事長：長岡 求

副幹事長：田中桃三、望田明利、
武内嘉一郎

年次代表幹事：田中桃三、
望田明利、武内嘉一郎、
小笠原 誓、渡辺 均
(年次順)

企画編集幹事：小泉 力、
鈴木 司、田旗裕也、
寺本貴尚、羽毛田智明、
宮田増美、村井千里、
山口まり、山田幸子、
遊川知久、渡辺 均

庶務会計幹事：上田善弘、
小沢 勇、河合伸志、
西原彩子、浜田 豊、
福永哲也

事業基金募集幹事：秋山泰男、
熱田 健、大林修一、
小笠原 誓、小黒 晃、
久保田芳久、齋藤俊一、
莊 智裕、鈴木邦彦、
竹下大学、富山昌克、
中川雅博、杉山秀之、
山下容子

(五十音順)

花葉会賞受賞者紹介

実直で信念に生きた行動の人

青島 尚祐さん

村 井 千 里

◎青島 尚祐氏の略歴

昭和7年7月6日 長野県に生まれる
昭和26年3月 長野県立下伊那農業高校卒業
昭和31年3月 千葉大学園芸学部園芸学科卒業
昭和31年5月 日本園芸生産研究所花き部
昭和32年4月 千葉県立野田高校教諭
昭和50年4月 千葉県立小金高校教諭
昭和54年4月 千葉県立沼南高校教諭
昭和55年4月 千葉県立柏北高校教諭
平成5年3月 千葉県立柏北高校退職
平成5年4月 (株)千秋社(清水公園の樹木管理)
平成9年6月 (株)千秋社顧問
平成11年6月 (株)千秋社退職
平成11年4月 松戸市「21世紀の森と広場」緑の相談員
となり現在に至る

この間「野生の樹木を見て歩く会(会員100名)」に参加し、創立者の東京理科大学村上孝夫名誉教授の後任として、会長を務めている。

青島さんは千葉県立農高の先生をと考え、園芸で教員試験に合格。だが千葉県に最初に建設される鉄筋校舎に見合う庭造りのできる先生をと、野田高校の校長が白羽の矢を射ったのが青島さん。花の生産を指導するという最初の目的は異なっても、植物を栽培し、管理できるといことで、普通高校の理科(生物)の教員を受託されたそうである。

校舎の建設で、旧校舎が変わり、温室が仮のビニールハウスになったりする中で、植物を通して生徒との交流を図り、冬は一晩も欠かさず、加温のためのストーブの給油に夜中に登校するという、実践力、信念の持ち主であった。鉄筋校舎への植物の配置と、現在のインドアグリーンの先駆けを実行されたり、授業には多くのアイデアを持ち、実験装置の開発、分子生物学の導入などを行い、進歩的な授業を展開した。

校舎の完成につれ、中庭は室内と同じ感覚で楽しめる庭として、下足に履き替えずに行動できるものとしてのフランス式庭園を造ったが、その中に和風の趣も取り入れるなどの工夫をされている。特に日本の南から北に自生する植物を生態観察園風に、乾燥地や湿地ゾーンを設



青島 尚祐氏

けるなどして、学習のための教材園を兼ねた独特の庭園を作成して、広く各地から見学者が訪れたそうである。また、学校花壇の設置や野田市の「花いっぱい運動」にも積極的に参加されたほか、千葉県高等学校教育研究会の園芸部会の地区委員に選出され、その後、同部会の編集委員として部会誌の編集に退職されるまでの20年間余を勤められた。

小金高校に移られてからは、昇降口前の庭園設計、アルミ温室の導入などを行い、その中に動物飼育室を設け、ハツカネズミの毛色の遺伝などまで幅広く実験し、目で見える教育に努められている。

沼南高校では、生物実験として、一人一鉢の菊づくりを試みた。その結果、勤労体験学習の指定校となり、全国会議に出席するなど、実践力が高く評価され、県内では有名教師として、何を提案し、発表するかと注目された。カイコの繭の色を緑、黄、オレンジ、青などに変えたが、致死遺伝子により純系を得ることができず、その先に出ることは不可能であったようだ。

直ぐに柏北高校に移り、中庭の設計を行ったりと、多忙な毎日を実直に勤め上げて、高校教員としての職を辞された。

教職を定年退職された後、(株)千秋社に呼ばれ、清水公園の樹木の管理を分担され、植物園協会の規定に見合う植物の多くを導入するほか、野草観察路などを整備されたりしている。

略歴の補足として記したように、多くの有識者の集う「野生の樹木を見て歩く会」の会長を続けておられるなど、自己宣伝はせずに人の苦勞を買って出るとい、実直で行動する方として、私は深く尊敬の念を抱いている。

花の伝道者として活躍する

落合 哲平氏

小 泉 力

◎落合 哲平氏の略歴

- 昭和9年7月8日 千葉県富津市に生れる
- 昭和29年3月 千葉県立木更津高校卒業
- 昭和30年3月 千葉大学園芸学部農業別科修了
- 昭和30年9月 東京都足立区島根町の実験家山崎邦雄氏のもとで研修（チューリップの球根促成栽培）
- 昭和31年4月 神奈川県茅ヶ崎市の実験家横田長吉氏（東山園芸㈱）のもとで温室切花栽培の研修。この間南米（ブラジルカアルゼンチン）移住を志望し花づくりで身を立てるべく研修に励んだがトラホームが検診の結果判明、南米行きを断念した。
- 昭和35年9月 サカタ種苗㈱（現 ㈱サカタのタネ）茅ヶ崎試験場勤務。温室花卉（シクラメン、球根ペゴニア、グロキシニア、ストック、実生フリージアなど）を担当し、採種技術や育種方法を習得した。
- 昭和36年9月 不動化学工業㈱平塚工場勤務。
- 昭和38年8月 ㈱千葉県都市公社辰巳団地熱帯植物園勤務（恩師浅山英一先生の指導のもと熱帯・亜熱帯植物の栽培維持保存管理にあたる）。
- 昭和45年4月 ㈱千葉県観光公社千葉県南房パラダイス勤務（植物園の企画、立案、建設にあたるが主として熱帯、亜熱帯植物の収集及維持管理に務めるとともに園芸係長、技術課長として後輩の指導にあたる）。
- 昭和55年4月 ㈱千葉県観光公社千葉県県民の森管理事務所勤務（指導課長及び次長として県民の森の運営管理にあたるがこの間林内の森林植生調査を行なう）。
- 平成2年4月 ㈱千葉県地域整備協会袖ヶ浦事務所勤務（京葉地区の緑地の維持管理にあたる）。
- 平成6年4月 落合園芸場を立ち上げ花卉栽培を始める。主として花壇用苗物の生産と販売を行なっている。年間約15～20万ポットを生産する。主な栽培品目1年草を主体とし（2～3ヶ月で成品化できるもの）、秋から冬はポットハボタン、パンジー、ビオラ、ストック、キンギョソウ、ダイアンサス、シロタエギクなど。春から夏はペチュニア、ピンカ、ペンタス、ペゴニア、サルビア、マリーゴールド、ケイトウ、アマランサス、コリウスなど。



落合 哲平氏

その他

社会活動の一環として地域社会に寄与するため先輩林角郎氏とともに、地元館山市はもとより安房郡内を中心とした園芸（花卉栽培）教育の普及と啓発を行なっている。一人でも多くの方々が環境緑化や植物に親しむ心を育てるために、「街づくりは花づくりから」を提案している。

現在、RHS J、JHBS、GA及び日本植物園協会の会員に所属している。また、日本キリスト教団南房伝道所（教会）の役員も兼務している。昭和30年松戸で受洗。

以上の経歴を拝見し、落合さんが農業別科で浅山英一先生の薫陶を得てより今日まで、花と共に過ごしてきた道のりを知ることができた。若き日の修行時代は当時の先進花農家で研修し、教を請い、技術を磨いた。

昭和39年当時、「辰巳団地熱帯植物園」で初めてお目にかかった時はシクラメンの鉢替えをしていたが、自信に満ち、楽しみにやっていたその時の落合さんと現在と少しも変わらない。花の心を知る落合さんはどんな花でも作りこなしてしまうような名人技の持ち主である。

千葉県が「県立植物園南房パラダイス」創設時に技術者として招かれて植物の蒐集や栽培の指導を担当し、以後熱帯植物を中心とした温室や庭園、展示、観光事業等の充実に尽力してその隆盛に貢献してきた。「県民の森」担当の際は県民が自然と親しむフィールドの現場責任者として活躍すると共に、豊かな房総の森にも目を向けての植物調査も行っている根っからの植物好きである。

退職後は自宅近くでハウス栽培を開始し、自ら行う花生産者となって、その栽培技術を遺憾なく発揮していると共に、ハンギングバスケット協会や地域への花の啓発、普及にも貢献している。

安定した道を選ばず、常に花作りに挑戦し続ける生き方は70歳を過ぎた今日も青年のように一貫している。彼こそが農業別科の専攻生として園芸学校の伝統を受け継いだ花の伝道者ではないだろうか。

伝統あるシクラメン産地の発展に尽力の人 千藤 猛司氏

村 井 千 里

◎千藤 猛司氏の略歴

昭和12年1月1日岐阜県に生まれる

昭和30年3月 恵那高校卒業

昭和30年4月 千葉大学園芸学部農業別科入学

昭和31年3月 同上修了

昭和31年4月 日本園芸生産研究所研修生

昭和32年3月 同上修了

その後、三井戸越農園や新潟県下での短期研修を経て、家業の「松の本シクラメン園」を継承。

平成16年11月 大日本農会より永年のシクラメンを中心とした経営により、花き部門の農事功績者として「緑日授有功章」を授賞。

千葉大園芸学部の温室管理室の入口で、一人黙々と種子を播いている無口な青年の姿が、何故か、50年経た今日でも思い浮かぶ。ちょうど卒業論文の実験で農場の片隅を占有してバラの手入れや調査をしていた夏休みの或る日のこと。それが園研の研修生であった千藤さんだ。

埼玉農試の越谷支場勤務となり、シクラメンの栽培試験に関係して、恵那の有名なシクラメン園である松の本シクラメン園が千藤さんの農園と知ったほどの交友の浅さではあるのだが不思議なものである。

千藤さんの農園を、何の機会であったか思い出せないのだが、一度、お邪魔した。しかしシクラメンの印象ではなく、多段式に作られたベンチでアンスリウムの鉢を栽培され、名古屋へ出荷していると説明していただいた。何か一日の忙しいスケジュールの一時であったため、松の本といわれる大木の松の木もじっくり拝見していないような私が、千藤さんを語るのには失礼だが、お許しを願って、昨年度、大日本農会の農事功績者として「緑白授有功章」を受賞されるに至った経緯を紹介させていただこう。

受賞のポイントは「安定した花き経営規模の現状」。新品種の育成と新技術導入によるシクラメンの種苗・鉢物生産と他品目を組み合わせた花き鉢物生産による経営の確立という「農業改良等の実績」。地域リーダーとして伝統的なシクラメン産地を新技術、新品種、新品目を導入して維持・拡充を図ったほか青年農業者の育成に努めた「地域産業への貢献」が挙げられている。

松の本シクラメン園は、お父さんの恩三さんによって創業され、恵那地方のシクラメン生産の推進に偉大な功績を挙げられてきた。恵那地方のシクラメンは伊藤孝重氏によって大正末から昭和にかけて、ドイツのピンネウス社の種子を購入し、種苗生産業として確立。これに影響を受けて千藤恩三さんが生産を始め、昭和9年には、戦前のシクラ



千藤 猛司氏

メン販売の最盛期を迎え、松の本シクラメン園では1坪大のフレームが200個を超えていたそうである。しかし第二次世界大戦でシクラメン生産を中止し、戦後の安定を見て再開、種苗生産を中心に経営。昭和32年から猛司さんが加わり、40年には経営を移譲され、青色申告による事業家計分離を行い、全国的にシクラメン生産者が増えたことから種苗生産を飛躍的に拡大し、全国からの需要に応えた。

一方、シクラメンと平行して導入してきたプリムラや観葉植物の栽培にも力を入れ、近代化資金などを活用してガラス室を年々増設し、47年には鉄骨温室を建設して、最新施設による近代的鉢物生産を開始するが、48年のオイルショックで苦しい立場に立たされた。しかしその対策として近隣生産者とコークスのボイラーを導入して重油に替え、無加温栽培可能なクレマチスやボタン等を作目に加えて経営を立て直した。またシクラメンは種苗生産のほかに鉢物の出荷に徐々に切り替え、昭和60年以降は鉢物生産を重点においた経営とされ、シクラメンの裏作にエラチオールペゴニアを加え、ベルギーの小鉢用クンシラン、アンスリウム等を輸入して作目に加えてもみた。また栽培技術では県農試が開発した底面給水法や調整ピートの培土による良品生産法を先駆的に導入して経営を確立させている。

さらに、良品を出荷する鉢物生産者としての信用から、大手食品会社と花壇苗の契約栽培が始まり、平成元年から今日に至るまで契約を更新している。

この間、昭和40年代には、生産者6名による技術研究グループを組織し、60～62年は「恵那花き研究会」の会長を務めたり、県指導農業士として活躍。農業大学の学生などの研修を受け入れ、農業の担い手養成に貢献。シクラメンの種苗販売を通して、毎年70名を超える全国のシクラメン生産者の相談に応じたり、技術の公開を行ったりと、全国のシクラメン産地育成への功績は偉大なものである。

平成5年には、県、市、生産者の協同出資で「恵那のシクラメン」を出版し、恵那シクラメンをブランド化し、市場での定着を図る仕掛け人の一人でもあった。

家族2人での経営は、年間延べ1,072人の雇用(通年雇用3人)で、その多くは地域の就労チャンスを確保する目的で、市のシルバーセンターにより高齢者を雇っている。

All-America Selections Breeder's Cupを受賞した 竹下 大学氏

編 集 部

◎竹下 大学氏の略歴

昭和40年6月10日生まれ

平成元年3月 千葉大学園芸学部卒業

平成元年4月 キリンビール(株)入社。

現在、キリンビール(株)アグリバイオカンパニー植物開発研究所勤務。

竹下大学氏は平成の時代に入って大学を卒業した、もっとも若い花葉会賞受賞者である。

入社以来一貫して交雑育種による花の品種改良に取り組むとともに、花の育種基盤整備に従事。ペチュニア、ニチニチソウ、プリムラを中心に多数の品種を商品化し、キリンビールを世界有数の育種会社として認められるまでにする。

特に匍匐性のF₁ペチュニアというまったく新しいコンセプトの品種‘Purple Wave’を育成したことの功績は大きい。その他、これらの功績に対して、2004年 All-America Selections が新設した、All-America Selections Breeder's Cup の、名誉ある初代受賞者に選出された。花葉会賞はこの功績に対して贈られたものである。

All-America Selections Breeder's Cupとは、北米の園芸業界に大きく貢献した品種を育成したブリーダー個人を表彰するものである。ブリーダーのモチベーションを高める目的もあるため、現役ブリーダーを対象としている。AASの性格上、種子系の花と野菜に限定しているようである。

選定理由は、①匍匐性のF₁ペチュニアという全く新しいコンセプトの品種（Wave）を育成したこと、②他社に先駆けて一般消費者ニーズを重視した品種を育成し、その品種がただヒットしただけに留まらず、北米花卉産業の事業構造を大きく変えるほどのインパクトを与えたこと、③ペチュニアだけでなく、ニチニチソウでもAAS入賞品種を育成したことが挙げられる。

自己紹介を兼ねて、これまでの業績等を本誌10～13ページに「日の丸ブリーダーの一人として」と題して原稿をお寄せいただいているので、そちらを読んでいただきたい。

また、花葉会賞受賞記念講演でも同タイトルで、育種に対する信条、後輩へ向け、ブリーダーとしてやっていくためのアドバイス等を話していただいた。その中のいくつかの言葉を書き留めて氏の原稿を補足し、紹介文とした。



竹下 大学氏

「ブリーダー 棘を失ったらフリーター」と、プロの開発者として棘を大事にし、アンチ研究室、アンチバイオテクノロジー育種として、フィールドでの仕事・交雑育種をしている。

Conventional (通常の) ブリーディングをかけた、(Conventional = 根 勉 書 成る) ともじり、育種には根気、勉強、記録し、成果を発表することが大切である。これにより、会社や社会に自分をアピールする。育種を達成するためには人の協力、植物の協力が必要であり、育種を成功させるためには受身でなく、運を見つけ、運を掴む努力が必要で、自分がAASの賞を受賞できたのも多くの幸運があったからとする。

現在進行形でサバイバルしている最中だが、商業育種はエンドレス。

・そのブリーダーに求められること

- 根 根気、根性、根拠を示す
- 芽 芽を出すこと
- 葉 言葉で明確に伝えること
- 花 花火を打ち上げること
- 実 実行力で示すこと

・花の育種を通じて実現したいこと

- 個として、社会貢献、文化、楽しみ
- 日本人として、愛国心、プライド
- 会社員として、コスト意識、利益
- 竹下大学として、ブリーダーの地位向上、
- 理想の育種会社を作ること

弱冠40歳、これからの活躍に大いに期待したい。

アメリカの植物園に勤めて

國 分 尚

1986年園芸学部を卒業し、2年間研究室の手伝いをしておりました。

ロングウッド植物園

1989年4月より1年間研修生としてLongwood Gardens（ペンシルバニア州ケネットスクエア）で働きました。ジュボンの経営者の個人庭園であったところで、現在でもジュボンの豊富な資金で運営されています。

ここでは、植物をどう見せるかを勉強しました。きれいに見せることが目的で、年によりテーマを変えて展示を演出しています。更に、テーマに沿って季節ごとに展示変えをし、手をかけて植物を見せることを行っています。夜間もオープンしている時もあります。マザーズデイのような特別な日は、多くの来園者が訪れます。

ここでは研修生をたくさん受け入れていて、年に12～13人ほどがいました。

モリス樹木園

1990年6月よりMorris Arboretum（ペンシルバニア州フィラデルフィア）で1年間研修を受けた後、学芸員補佐として正式な職員となり、1993年2月までここで働きました。

植物園に所在している植物の登録のための植物園データベースの世界標準であるBG-BASEに触れることができ、さらに、植物園用地図システムBG-Mapの開発に協力しました。

現在ではペンシルバニア大学の付属植物園ですが、ジョン&リディア＝モリス兄弟の経営する鉄工所の資金で作られた植物園で、東アジアの温帯地域の植物を収集し、マグノリアのコレクションが有名です。

フィラデルフィアの郊外の丘陵地帯に位置し、彫刻と植物の融合がテーマです。教育や市民との繋がりを大事にし、近隣の小学校から児童を呼んで植樹祭を行ったり、近隣の小学校から見学に来る児童を、ボランティアが園内を案内をしていました。子どもが土や植物と触れ合う機会が減っていますので、野原に出て自然に触れる良い機会となっています。

また、社会人のクラスも開いており（10年前の受講料ですが、半年で90～200ドル）、近隣の人が受講しに来ていました。

園外に出ますと野生の林が広がっていて、ユリノキやアメリカハナミズキの野生の姿が見られました。北米東



部では、民家の庭に使われている植物は東アジアのものが多く見られました。日本の北部と似た樹木が多く、私には馴染みやすく感じられました。秋咲きのHamamelis virginianaの葉が落ちないで花が咲くのが見られてうれしかったです。

トンプソン植物園

1993年3月からは、BG-BASE、BG-Mapの経験を買われ、アリゾナのど真ん中にあるBoyce Thompson Southwestern Arboretum（アリゾナ州スベリオル）で植物記録担当・多肉植物コレクション主任としてカクタスガーデンの管理を任されて、毎日サボテンの棘に刺されています。

この植物園はソノラ砂漠の北の標高の高い場所にあり、変化に富んだ地形の中に位置し、年間降水量250mm、気温は50℃になることもあります。周辺には、ホホバやペロカクタスなどが自生し、キングスネークやガラガラヘビなどの野生動物を多い場所です。

開園当初は、有用植物の収集が目的でしたが、現在は観賞植物で、南北の乾燥地、オーストラリアの植物を集めています。グージャムツリーが目玉となっています。

どの植物園も1週間に1度ほどフィールド研修がありました。その折に他の植物園に見学に行くのですが、いろいろなタイプの植物園を見ることができました。

日本と米国の植物園の違いは、それぞれの植物園には理念があり、研究・教育・レクリエーションの3つの柱があり、それにより運営されています。

アリゾナには3年間おり、サボテンの仲間を堪能させてもらいました。1996年4月より園芸学部採用され、現在に至ります。

（文責：編集部）

会報「花葉」発行にともなう協力金のお願い

日頃より花葉会の事業にご協力いただきまして、ありがとうございます。深く感謝いたしております。

さて、花葉会では千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室を中心に、花卉産業界に携わる会員相互の親睦、研鑽と情報交換を目的に、会報「花葉」を発行してまいりました。

本来この会報の発行は、広告料収入により印刷・郵送費等を充当し、会員の皆様には無料で配布することにしてまいりました。しかし、昨今の経済情勢のため広告収入は減少し、資金的に逼迫しているのはご周知のことと存じます。

そこで、私どもといたしましても一層の合理化をはかり冗費の節約につとめる所存ですが、会員、読者の皆様には協力金の拠出をお願いする次第です。

また、今後とも「花葉」の内容につきましてはさらに充実させ、会の活動も一段と活発にしてゆくつもりですので、ご理解のほど、なにぶんにもよろしくお願いいたします。

なお、ご送金につきましては、同封の郵便振替用紙にて、下記の要領でお願いいたします。

花葉会幹事一同

1. 振替口座番号 00150-9-13341 口座名 花葉会
2. 花葉会会報「花葉」発行協力金 3カ年分として 5,000円（「花葉」24号～26号分）
3. 問合せ先 〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室 花葉会事務局
TEL : 047-308-8810（直通）

編集後記

◆花葉サマーセミナーのテーマは「生産者育種」。それとは違う立場で、新規参入種苗会社で活躍中の花のブリーダーの方々に登場いただきました。育種の世界はおもしろい！◆最近の「花葉」は執筆者の顔ぶれがにぎやかになったねと、うれしい感想をいただきました。若い読者層をつかむためには若い執筆者にと、今号も渡辺均先生にお骨折りいただきま

した。◆上田善弘助教授が岐阜県に転職。「花葉」編集としてお世話になりました。感謝いたします。◆花葉会ホームページをご利用ください。「我が社の新商品」紹介コーナーもあります。<http://www.kayoukai.net/>◆「花葉」では会員の皆様の寄稿をお待ちしております。花葉会事務局宛、または編集人 E-mail: flower@mua.biglobe.ne.jp へ。（山田 幸子）

花 葉 2005 No.24

平成17年12月10日発行

発行人 安藤 敏夫

編集人 山田 幸子

発行所 花 葉 会

〒271-8510 松戸市松戸648

千葉大学園芸学部

花卉園芸学研究室内

編集 (有)フローラルプランナーズチーム

写植・印刷 (株)インタラクシオン



観葉植物と花木鉢物 卸売

株式会社 川崎植物卸売センター

有限会社 はら 園 芸

〒213-0014 川崎市宮前区菅生ヶ丘1番1号

Tel 044-976-3445

Fax 044-977-9951

F A J は花卉の新しい流通をめざす会社です



FLOWER AUCTION JAPAN

東京都中央卸売市場大田市場花き部

株式会社 フラワー オークション ジャパン

〒143-0001 東京都大田区東海2-2-1

企画課 TEL 03(3799)5440 FAX 03(3799)5521

ホームページ <http://www.faj.co.jp/>

長岡 求 S. 53 園卒
田中 義一 S. 59 院了
猪熊 美和 H. 03 園卒
キンラウイン H. 04 院卒
加藤 優美 H. 11 院卒
組員由紀恵 H. 11 生卒
村上 智弘 H. 12 生卒
荒井のり子 H. 12 生卒

信頼と信用を第一に



愛知豊明花き地方卸売市場

豊明花き株式会社

ようこそTOYOAKEへ
www.toyoake.or.jp



〒470-1141 愛知県豊明市阿野町三本木121番地
Tel.0562-96-1187(代) Fax.0562-96-1188

権永野包 S. 59 園
山本品美 H. 4 園
河村安恵 H. 5 園
長々本北斗 H. 18 生

■情報満載の映像セリ
■便利な予約相対取引
■ビジネスチャンスを広げる
ネット取引 TOP NET





タネはタキイ

2005 170周年

バイカラートーチ

タキイ交配

F1高性系葉牡丹

— バイカラートーチ・初紅・冬紅・初夢・晴姿 —

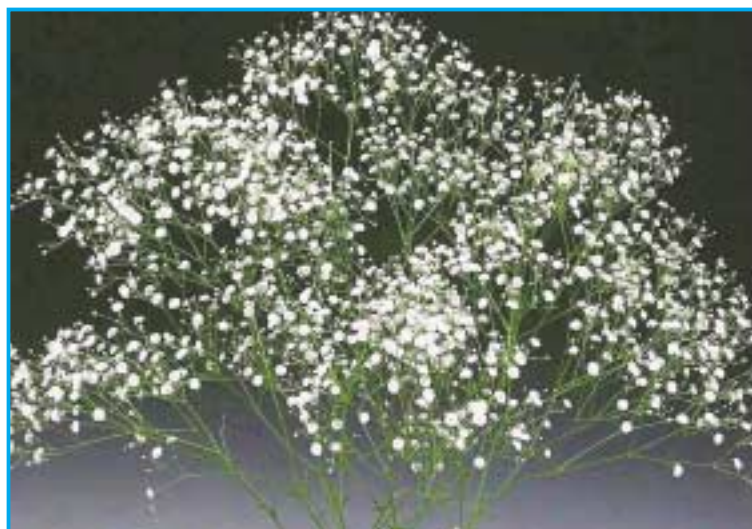
東京丸葉系統・紅白・日の丸と揃った待望のF1高性種。
葉がコンパクトにまとまるので切花、
ポット栽培に好適な品種。



豊かな地球のあしたのために...

タキイ種苗株式会社

本社/京都市下京区梅小路通猪熊東入〒600-8686
TEL(075)365-0123(大代) FAX(075)365-0150(代)
支店/札幌・仙台・東京・福岡
農場/滋賀・北海道・茨城・長野・和歌山 www.takii.co.jp



花持ち一番！
オリジナル
カスミソウ
‘アルタイル’



山梨県北巨摩郡小淵沢町上住尾3181
TEL (0551) 36-5911 FAX 0551-36-5900
(株)ミヨシ富葉育苗センター
HP <http://www.miyoshi.co.jp/>

編集人 山田幸子
発行人 安藤敏夫

発行所 花葉会

虹色スミレ

NIJIIRO SUMIRE

with
Licca

サカタのタネが十数年の歳月をかけて改良したパンジーの新品種。光のスペクトルのような、これまで考えられなかった美しい花色をお楽しみください。

リカちゃんとのコラボレーション!! オリジナルのリカちゃんのラベルがついています。

株式会社 **サカタのタネ**

〒224-0041 横浜市新都区仲町台2-7-1
TEL 045-945-3800 (代表)

「虹色スミレ with リカ」の売上金の一部は骨髄バンク事業に生かされます。

〒271-8510 松戸市松戸六四八番地
千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内
電話〇四七・三〇八・八八二〇